

目次

一、巻頭の言・・・・・・・・・・・・・2

二、特別寄稿・・・・・・・・・・・・・5

成山哲郎先生・・・・・・・・・・・・・6

松尾正純先生・・・・・・・・・・・・・10

大森竜一先生・・・・・・・・・・・・・13

山田高廣先生・・・・・・・・・・・・・17

佐藤忠之先生・・・・・・・・・・・・・19

酒井進之介先生・・・・・・・・・・・・・22

谷繁強志先生・・・・・・・・・・・・・25

宇田川哲哉先生・・・・・・・・・・・・・28

三、加盟校紹介・・・・・・・・・・・・・31

金沢大学・・・・・・・・・・・・・32

近畿大学・・・・・・・・・・・・・36

国士舘大学・・・・・・・・・・・・・40

上智大学・・・・・・・・・・・・・44

成城大学・・・・・・・・・・・・・48

専修大学・・・・・・・・・・・・・52

中央大学・・・・・・・・・・・・・56

東京大学・・・・・・・・・・・・・60

富山大学・・・・・・・・・・・・・64

明治大学・・・・・・・・・・・・・68

早稲田大学・・・・・・・・・・・・・72

四、加盟校連絡先・・・・・・・・・・・・・76

五、歴代幹部名簿・・・・・・・・・・・・・79

六、全日本学生合気道連盟規約・・・・・・・・・・・・・91

七、巻末特集 アンケート

「合気道を始めた時から現在にかけての

合気道に対する考え方の変化」について

・・・・・・・・・・・・・97

一、 卷頭の言

巻頭の言

全日本学生合気道連盟

第六十五期委員長 山本佳奈

このたび、機関誌「連盟誌」が第五十二号を迎え、無事に発行の運びとなりましたのは、ひとえに皆様方の温かいご支援とご協力の賜物と、心より感謝申し上げます。

本誌には、先生方の珠玉のご寄稿をはじめ、各大学の個性豊かな特色が織り込まれており、その内容の充実ぶりに深い感銘を受けております。ぜひとも多くの皆様にご高覧賜りますよう、お願い申し上げます。

今年度、(NPO)日本合気道協会が開設五十周年を迎えられました。誠におめでとうございます。また、国士舘大学合気道部が60周年を迎えられます。平素から大変お世話になっている皆様の節目の時代に立ち会えたこと、非常に喜ばしく思います。次なる節目、さらにはその先におきましても、末永くご厚誼を賜りますよう

う、心よりお願い申し上げます。

さて、当連盟はその結成から六十五年が経ちます。六十年以上の歴史の上に合気道の多様性を最も体現できている学生団体の1つが成り立っていることを、演武大会や勝浦合宿の運営を通じて感じました。そして、当連盟は「学生の、学生による、学生のための合気道連盟」という理念を掲げ、流派間で優劣を争うことなく、新しく違う流派を受け入れる環境を大切にしてきました。

しかしながら、全国学生合気道連盟と当連盟という二つの組織に分かれ、その交流が少ない現状にあります。当初は、道場や流派の違いに左右されるのではなく、同じ時代に合気道を学ぶ学生同士、流派の垣根を超えてつながり、互いに切磋琢磨し合おう。そして、学生合気道の発展に寄与しよう、ということが目的であったはずで、その目的を再認識し、これからの課題として真摯に向き合っていくべきでしょう。真の「学生の、学生によ

る、学生のための合気道連盟」を実現していけるよう、一つにまとめることは難しくても徐々に交流を深めることで、成長していかなければならないと感じております。

また、副委員長として四ヶ月、委員長として七ヶ月間務めた中で、初めは一介の大学生である私が、二十を超える大学の学生連盟を率いる重責を担えるのかと、不安や戸惑いを感じておりました。しかし、歴代の委員長の方々が残してくださった貴重な資料、頼もしく聡明な連盟委員の皆様、そして先生方や各大学の皆様の温かいご支援のおかげで、ここまで歩んでくることができました。この経験を通じて、到底1人では成し得なかったことも、みなさまとの交流によって実現できる、人と人との絆がもたらす素晴らしさを身をもって感じております。こうした横のつながり、連盟誌という過去から未来への架け橋となるタテの繋がりも大切に、今後も連盟役員一同力

を合わせて、学生合気道の発展のために尽力していく所存です。先生方、連盟加盟校の皆様におかれましては、今後ともあたたかいご支援をお願いいたします。

末筆になりましたが、連盟誌の発行に際しまして、お力添えくださいました先生方、連盟加盟校の皆様、そして各スポンサーの皆様には厚く御礼申し上げます。

二、 特別寄稿

成山哲郎 先生



受について

ある12月の稽古後、当時、富木謙治先生のパートナーとしてご活躍されていた大庭英雄先生と道場の隣にあるお好み焼き屋で、お酒を酌み交わしながら長い時間先生のお話を伺った際のことです。最初に先生は、「成山さんはいいですねえ、こういう時代に生まれて。昔は武道はね、二師に見（まみ）えずと言ってたね。私はね、何度も植芝先生から誘われたけど、ずっと富木先生一人に6つについて教わってきました」と仰いました。

私は二師どころか、そのとき師匠は三人もいるわけで非常に複雑な気持ちになりました。ただその後、植芝先生の強さを再認識した演武の模様を話され、先生のお話の意図を理解しました。

講道館でならし、柔道の実力者であった大庭先生でしたが、富木先生のお手伝いのため戦前満州に渡りました。満州国では、神武殿で皇紀2600年日満武道大会が、

天覧武道大会として、満州国のラストエンペラー溥儀の前で行われました。

合気道だけでは無く、日本を代表する武道が披露されたわけです。合気道は当然植芝先生。その受を大庭先生が取りました。日頃から植芝先生の強さをいやというほど富木先生から聞かされている大庭先生は、植芝先生の強さを試すため本気で攻撃をしました。

「どうだったですか？」と私が聞くと「最初はとてもゴツゴツしていました。そのうち先生の顔がみるみる真っ赤になって気付いたら全てやられました」と大庭先生は答えられました。演武が終わって緞帳が下りるやいなや百雷が落ちたぐらいに「この未熟者めが」と怒られたそうです。その怒られている最中に直心影流薙刀の園部秀雄先生が「植芝さん、今日の演武は私が今まで見たうちで一番良かったです」と話しかけてきました。剣道家等との対戦ではほとんど負けたことが無い傑出した女性武道家の言葉に、植芝先生は「そうかね、どこが良かったかね」と言いながら、ニコニコ笑ってお二人で出て行かれたそうです。

演武そのものは有名だけれど、なぜかというその理由は誰も言わない。それは大庭先生が本気の攻撃と受をして、植芝先生の技を引き出した賜物だったわけです。

また、大庭先生はよく剣道を例に出して受の大切さを教えてくれました。「どんな人とても練習するときは全部捌くのではなくて1本必ず取られて上げなさい。自分の弟子であっても、誰かと対戦するのであっても良い技は必ず1本は受けるっていうことですね。対戦している相手はね、どちらが上かすぐわかる。だから10本打ち込んできたら、その中の一番いい1本は受けてあげたらいいのだよ」と。

大庭先生は病気で秋田に帰郷されても柔道と合気道を教えていました。療養中であっても稽古の最中は受身を取られたそうです。そこまではしなくていいと思うのですが、それほど受身の大切さを示したかったのだと思います。大庭先生は岩みたいな屈強なお身体でしたが、女子や初級者の受もよくされていました。我々には倒れてくれませんでした。

私が1969年10月に桃山学院大で乱取法のデモンストレーションを行ったときは、「成山さん、あなたは17本の受をしていただきます」と指示がありました。取は大庭先生が指導された方で、後に私がお世話になる昭道館初代理事長の次女にあたる方でした。当時私は大学4年生で主将。試合でも受をしたことは無かったし、女子の受をしたこともありませんでした。しかし大庭先生の指示であれば仕方ありません。その当時は、まさか大阪まで来て女子の受をすることになるとは思いませんでした。今は大庭先生の教えが分かるようになりました。

どんな風に投げられても受が取れるということは非常に重要です。私は富木先生の受も、大庭先生の受も、小林裕和先生の受もしました。塩田剛三先生、井上方軒（鑑昭）先生の受もしました。先生方が連れてこられた受以外の受は、ほとんど私を取りました。受けながら吸収する、投げられるということはとても大事なことです。通常の稽古では掛かり稽古でしっかり吸収することが

大切です。良い技は潔く受ける。頑張り合うことは難しくありません。正しい技をかけることは大切ですが、正しい技を正しく受けるということは更に大切です。

アンケート

『日常と合気道の結びつきについて』

今から48年以上前、昭道館が中央道場として改築、道場開きの折に合わせて、恩師の富木謙治先生より一通の封書を速達（昭和51年2月21日付け）でお預かりしました。

そこには「生涯体育」というフレーズが用いられ、新しい時代に沿った、これからの合気道の稽古の在り方が大変分かりやすい文章で記されていました。この文章は今でも昭道館道場のパンフレットとして使われています。

合気道のすすめ

これからの時代は、若いも、若きも、男も、女も国民総スポーツの時代です。スポーツによって、心とからだを健康に保ちましょう。スポーツは生涯つづけることで効果があります。だから生涯体育という言葉があります。

合気道は、そのための条件を完全に備えております。合気道は、古い柔術から生れた新しい武道です。昭道館合気道の特色は、「当身技」と「関節技」とを新しい体系にまとめたものです。これらの「わぎ」は、柔術の中のとくに技術性の優れた有効な「わぎ」です。

練習方法は、「形」稽古と「乱取」稽古とに大別されますが、年齢と体力に応じて、次のように分けて行います。

1、子供のためには、姿勢・移動・崩し・受身などの基本の「形」を中心をおき、敏捷性、安全性、しつけ教育に重きをおきます。

2、青年のためには、「形」から「乱取」にすすみ、競

技の厳しさと面白さを体験し、勝負を通して瞬発力と気力とを養います。

3、女子のためには、「手刀法」「離脱法」に力をいれ、護身性の「技」を修練します。これによって姿勢を抑止、柔軟性と巧緻性とを養います。

4、成年および老年のためには、「形」稽古に中心をおき、古い柔術の剣、槍などの多角的「わぎ」をも究明します。これによって、とくにからだの柔軟性を保ち、老化を防ぎ、健康の保持に役立てます。

大阪市阿倍野区阪南町一の二八の九

(地下鉄昭和町駅下車)

昭道館

松尾正純 先生



柔らかい手

1990年代から海外道場で合気道指導を始め長年継続してきた甲斐があつて、一昨年ロシア人1人、昨年ポーランド人2人に7段を推挙し、印可されました。

私は、彼らと共に喜んでいますが、大事なことは今後の彼ら自身がどのように自らの合気道を向上させるかにあるのです。

私が彼らに与えた課題は「柔らかい手で技を掛けることが出来るようになる」です。前から後ろから片手、両手、諸手など腰を落として腕を強く掴まれた場合に対処する方法です。

この考え方は彼らの常識外で、なかなか対処出来ません。彼らにとってその状況では上腕2頭筋が問題を解決してくれるはずだからです。

でも、そうすると強く握った相手の手は外れてしまい技を掛けることは出来ません。

しかし、もし上腕3頭筋を使うことが出来ると面白い

ように技は掛かります。

上腕2頭筋を強制的に使わせないために、肘を曲げず腕をまっすぐ伸ばし、五指を軽く開いた状況で握らせ、試してみるとその感覚が理解できます。

もちろん使えるようになればどのような形であつても効果は抜群です。

これができると、あら不思議！受けの手は握ったまま離れることがなく、大きく崩れて、飛ばされます。

というわけで海外の高段者と競ってみなさんも試してみても如何でしょうか。

片手持ち腰砕き（隅落としとは違い、受けはその場で真下に潰れる）もできるようになります。

アンケート

『日常と合気道の結びつきについて』

合気道に出会い、楽しんで続けるうち、いつも身近にあるという感覚になりました。私が現在も諸君と共に楽

しめるのは合気道だからで、他の運動であつたらこうはならなかったと思うのでありがたいことです。

みなさんは気づいていないでしょうが、既に幸運な出会いをしていることになりますね。

出会った頃は日常生活の中で上達に役立つ工夫をいろいろ考えましたが、続けたのは通学中の吊革のぶら下がり（上腕3頭筋強化）程度でした。

それより上達の意欲は身体の鍛錬以上に精神の分野に広がっていききました。ひとつは、植芝盛平開祖の初期の生徒たちの多くが中村天風師のもとで心身統一哲学を学んだという事実です。

私の愛読書は「ヨーガに生きる」ですが、天風師は多くの書籍を残しておられるので興味のある方は目を通されると良いでしょう。

次に、私が強く惹かれたのが、小野派一刀流免許皆伝の山岡鉄舟と白井亨の生き方です。

幕末から明治にかけて生きてきた二人は、共に巨大な壁となつた先達を突破するための精神的鍛錬に、鉄舟は臨済禅（適水和尚他）、白井亨は浄土宗（徳本行者）が関与していることに興味を持ちました。

鉄舟は27歳で浅利義明に弟子入り、義明を超えるべく修行を続け44歳に至り、臨済禅を大悟し浅利から一刀流印可を受けることが出来ました。

勝海舟は当時珍しく合理的思考をする人間と私は理解しますが、その彼が『鐵舟随感録』*の中で「神通力」という表現をしている箇所があり興味をそそられました。

直新陰流免許皆伝の勝が白井亨と立ち会った際「真に不思議な、神通力を備えている」ので敵わなかったとあり、白井との遣り取りが綴られています。

28歳の白井亨は63歳の寺田と立会い、敵わずに弟子入ります。未熟さを寺田に叱られ高僧に教えを受けることを勧められ、徳本行者を訪ねた亨はその念仏する姿を見て「剣法の妙処を悟」ります。そして寺田宗有と

立ち会った白井亨は一刀流印可を受けることが出来ました*。

身体的鍛錬と並行して精神的鍛錬の重要性を強く示唆する私が好きなエピソードです。

よく知られた話で、沢庵和尚が柳生宗矩に与えた「不動智神妙録」を例にとるまでもなく、仏教と武道の結びつきは深いと思います。

そこで合気道を学ぶ我々は、精神的鍛錬に心を致しつつ、身体鍛錬を行うのが良いと私は考えるのです。

*『鐵舟随感録』山岡鉄舟の随想集に勝海舟が注釈を付けた書籍

**『天真伝白井流兵法遣方』における白井亨の履歴について

—その史料学的信頼性の検討— 和田哲也

https://www.jstage.jst.go.jp/article/budo/44/1/44_25/_pdf/-char/ja

大森竜一 先生



学生諸君へ

スポーツの歴史は古く、大会の種類もオリンピック、世界選手権、地区大会等と数多く存在します。当然大会によってその規模は様々であり、競い合われる競技種目（種類）も異なります。そして年々新しい競技種目が数多く誕生し、種目の入れ替えがあったりもします。

ところで、「記録は破られるもの」と言う名言がありますが、大規模な大会であれ、小規模な大会であれ、種目の種類を問わず必ず当てはまる格言だと思います。

陸上競技で考えた場合、例えばマラソンにしても短距離走にしても、その当時に圧倒的だと思われた記録でさえも、次々に更新されてきています。日本人にとって短距離走で九秒台をたたき出すことは夢のまた夢でしたが、今では九秒台で走れる選手が何人も存在し、その先の0.01秒で競い合っています。

体操競技はタイムではなく難易度と言う考え方になります。昔は難易度ウルトラCで目を白黒させたものですが、今ではE難度やF難度と言った到底昔では想像もつかない大技が世界の多くの選手によって披露され、その完成度で競われています。俗な言い方をすれば、当時の金メダルホルダーが時を越えて現代の選手と競い合ったとすれば、足元にも及ばないということになります。これは決して昔の方を馬鹿にしているのではなく、技術がそれだけ進歩しているという話です。昔の方の努力の結晶があつてこそ、皆がその技に追い付け追い越せと切磋琢磨し、努力することによって成し遂げられてくるのです。更に科学技術の発展により、科学的検証や新しいトレーニングシステムの構築、それらが加わることで超難易度の技が考え出され、成し遂げられていくわけです。

さて、これらを合気道に照らし合わせた場合はどうでしょうか。皆様ご存知のとおり、一言に合気道と言っても競技を行っている団体もあれば、競技そのものを否定している団体もあります。後者に至っては、全

く別の次元の話だと思われる方もいることでしょう。しかしながら武道には「守・破・離」という教えがあります。師匠の教えを守り、ひたすら模倣して稽古するわけですが、加えて様々な角度から一つ一つの技を検証し、創意工夫することも必要だろうと思います。当然身勝手な創意工夫は論外ですが、真剣に模倣しながらの創意工夫は必要なことだと思います。そうであれば武道の技そのものが衰退してしまうと思います。確かに武道とスポーツでは発生の経緯は違いますが、その技術を真剣に継承（模倣を含む）し、師（先人）を超えていく気構えと努力をもって精進するとう意味では全く同じだと思います。

学生が合気道を学ぶ期間は四年間という短い期間であり、且つ合気道は前述のようなスポーツと比べて技術の違いが分かり辛いかもしれませんが、それでも努力次第でそれらも分かるようになると思います。皆様の更なる活躍を期待しています。

アンケート

『日常と合気道の結びつきについて』

今回のテーマは、一般的な日常（社会）と合気道との結びつきを指しているのか、個人の日常生活と合気道の結びつきを指しているのか、捉え方が幾つかあるように思います。

先ず私個人の合気道との距離（関わり）についてですが、合気道は私の職業ですので生活の一部として関わっていることになります。大学生の時に合気道と出会い、その技に魅了され、迷うことなく職業として選び今日に至っています。合気道を始めておよそ四十年になりますが、一年間にほぼ三百六十五日、多い日には一日三コマ（四コマの指導をしています。つまり一日に携わっている時間を考えた場合、合気道との結びつきという意味では大変強い（濃い）ものであるといえます。日常的に合気道をしていますので、「生活の一部、或いは生活そのもの」と言えると思います。

では日常生活の中ではというと、我々は合気道を稽古

していく上で様々な技法を身につけていきます。中でも技法を修得する為の土台となる基本の技術である「目付・間合い」等のスキルの習得は、合気道をしていない時であってもその効力が発揮されていることが分かり易く、皆様もその恩恵を受けていることに気づかされていることでしょう。稽古のお陰で視野が格段に広くなり、前を見ているも周りの状況が自然と目に映るようになったと感じたことがあると思います。それこそ目付練習の効果と言えます。危険防止の観点からも優れた防衛効果が発揮されているといえます。

「間合い」についても対人練習により「適切な間合い」が自然と身に付いていることと思います。このことにより、新型コロナウイルス等の感染症がパンデミック化したときであっても、適切な間合いを確保することにより、感染を防げた方も多いことと思います。人に不快感を与えない距離（近すぎない距離）を保つという意味でも、適切な間合いの確保は必要不可欠なものであり、皆様は知らず知らずのうちに実践されていることと思います。日常と合気道の結びつきは大変深いものであり、且つ

身近なものであると思います。

山田高廣 先生



日常と合気道の結びつきについて

この題名にはいろいろな切り口が考えられるが、合気道を含む武術という観点から考えると、日常との結びつきは希薄である。特に現代人の日常とは。現在の部員の大半は畳の上での生活をしたことがない。つい数十年前の日本人までは大昔から畳や莫座の上で座る生活を基本にしてきた。だから立ち居振舞いという言葉があるのである。生活の中で頻繁に立ったり座ったりをしてきたのである。武術はそのような生活文化から生まれてきたのである。

体の使い方は生まれ育った文化に規制される面が大きい。小生は外国人の指導をすることもあるが、どうしても伝えづらい面があるのは否めない。武術は肚を中心とするので彼等も肚と言う言葉は知っているが、彼等の伝統文化では中心は胸なので伝わりが悪いのである。我が国の椅子文化は新しいので、現代の若者にも名残が残っているのだからまだ伝え易いのであるが、その伝統が薄れ

ゆく中で、いままでの以心伝的な指導だけでなく、やって見せ明確な言葉で説明することが必要であると思っ
っている。

畳の文化と椅子の文化の動作の一番の違いは上下の動きである。椅子から立つのと床から立つのでは圧倒的に運動量が違う。ただ立てばよいというわけではない。見た目にも美しく自然で優雅に立てなければ不作法である。そのような立ち居振舞いを心掛ければそのような足腰が出来るのである。

このような文化の武術は上下の動きを攻防の基本とする。ただ見た目に上下に動くだけでは如何にも芸がない。上下の動きを体に内面化するのである。こう書くと学生諸君には何のことかわからない人も多いであろう。短い紙面で言葉だけでは説明は難しいので止むを得ない。キーワードは肚である。肚といっても内臓の腹ではない。肚という器官は存在しない。しかし武術的身心が出来てくると、下腹（臍下丹田）にバランスの中心点を実感出来るようになり、そこを中心にした上下の動き（内面化した）で技を使えるようになり、この状態を肚が出来

ていると称するのである。

この状態は呼吸も深く平静で、興奮せず冷静な闘志（気迫）で相手に対処できることから、武術を離れて、一般社会でも大事な時に平静にバランスの取れた決断をする人物を肚が出来ているというようになったのである。

これが敷衍されて武術を稽古すると人格が磨かれるという論になるが、俗論でそのような一般化は出来ない。人格が磨かれるような稽古を積んだ者のみができるのである。

ただ肚に意識を集中出来るようになるとそれ以前に比べ物に動じないようになるのは、小生のような欠点の多い人間も何となく感じているのは面白いことである。武術は衆の勢いを頼まない自立した人間を創るものと小生は思っている。

佐藤忠之 先生



こんな時代だからこそ心を澄ます

グローバル化という言葉が、世の趨勢のように謳われ始めて久しい昨今ですが、一方では行き過ぎたグローバル化によって、培われてきた世界各国の歴史や伝統や宗教を含めた固有文化の消失を危惧する動きが現れ、保存継承にたいする警鐘の聲が上がってきています。過ぎたるはなお及ばざるが如しと古諺にもありますが、確かにそう感じる現実が、いま世界中で我々の目の前に散見しています。

私たちを取り巻くマスコミ報道から来る情報と趨勢は残念ながら真偽錯綜して必ずしも真実を知らせているとは限りません。氾濫する情報のうねりの中で、歪曲された事実があたかも真実の顔で社会に映し出される時、よほど心して注意しないと我々の目は、知らず識らずのうちに虚構に慣らされ、焦点さえ狂わされかねない危険性を孕んでいます。我々はその意味では怖い情報操

作社会にいます。

昔から真実とはなかなか正確に人々の目に触れ難いもので、他方で真実とは人の欺瞞で糊塗されやすく、哀しいかな人間には、目の前の事実が真実かどうかよりも、その事実が自分の目にどう映るかによって自身の心を決めて仕舞うところがあります

武道で極意とされる「目付」とは無構えや自然体と呼ばれる機動性のある柔軟な正しい姿勢のもと、偏りのない複眼的に広がる視野を指します。

武道の訓えはこの偏らない視覚を、転じて聴覚にも、さらには思考回路や心の持ち方にも応用できるとするもので、人生処世に生かせば、激動の中でも、息すらひそめる注意観察の時期でも、肚を据えて物事の本質を感じ取る事はできると信じたものです。でなければ、時間

をかけて折角武道を学ぶ価値も半減希薄となってしまいましよう。

たとえ流行趨勢の真偽の激流に流されようとも、或いは流れに身を任せたとしても決して溺れず、真実の在りかを求めて、浮ける瀬があればそこにとどまって先ずは己の目と耳と心を澄ます。澄ませば濁流の中にも真実を垣間見られるはず、感じるはず。そうであると私は信じます。

人生まことに早いもので、私は八歳で武道に触れて、まもなく60年になろうとしています。最近ようやく何のために武道を学んでいるのか、ようやく自分なりに躊躇なく答えられるようになってきました。

混濁するこんな時代ならばこそ武道にたずさわる者として、肚を据え、背筋を伸ばして「心を澄ます」ことに、矜持意識で黒帯を締め直したいと思っています。修行の道、永くも楽し。

アンケート

『日常と合気道の結びつきについて』

私の場合、日常生活そのものが自身の稽古と指導する立場にありますので、結びつきとえば、合気道がそのまま生業に繋がっている、とお話するのがいちばん素直な所感です。

日々の中で、私は合気道だけを凝視しないで武道をとめて広い眼(遠山の眼)で分析するのが好きです。つまり合気道を日本武道を構成する重要な一環としながら、その姿を客観的に見る。その見地から合気道の持つ独自性、特性を平易に整理して広く伝えられるよう、合わせてそれを自らの修行にも役立てようと思わしています。

叶うならば皆さんの意見を日常に聴かせて貰えるなら、お互い忌憚なく話せるチャンスに恵まれたなら、きっと楽しいだろうとひそかに希望しています。

酒井進之介 先生



自由寄稿

今から30年前、私がまだ大学2年生の時に初めて全日本学生合気道連盟の研修合宿に参加させて頂いた時のことはとても印象に残っています。

当時の先輩方は一人一人が大学のクラブを代表してきているという、ある意味で何処か意地がぶつかり合うような張り詰めた雰囲気がありました。合宿所ではこれまで全く知らない他大学の同期と同部屋で起居を共にし、いろいろと思うことを言い合っていたのも懐かしい思い出です。

その頃ご指導を戴いていた先生方は田中茂穂先生、寺田精之先生、松尾忠敬先生、成山哲郎先生でした。指導をされる先生方の技はとてもシャープでしたが、そのご指導は今思い出してもとても気持ちのこもった、厳しさの中にも学生に対する教育者としての温かみを感じるものだったと思います。

忘れ難い思い出はいくつかありますが、その内の一つ

は学生が夜間に先生方のお話を聴講する「講話」という場でした。学生は一同体育館に集められ、先ずは聴講する際の立ち方を実行委員の学生より「指導」受けます。そうして暫くしてから先生方が登壇され、講話をいただくのですが、田中先生、寺田先生、松尾先生のお話される内容はどれも国を想う国士そのものでした。そして最後に登壇された成山先生からは「つくり」の稽古方法についての説明と、集められた学生はみな私服でしたが、実際にそれをその場で稽古いたしました。

私自身、今こうして毎春の研修会の場で学生のみなさんへ指導をさせていただく機会を得て本年度10年目となります。少しでも先生方の姿に近付けるようこれから精進して参りたいと思います。

本連盟が末永いご発展を遂げられますことを心より祈念しております。

アンケート

『日常と合気道の結びつきについて』

一口に合気道と言ってもその稽古内容は様々です。基本動作や実力の養成、技法に至っては正に星の数ほど習熟しなければならぬことがあります。もちろんそれらは相互に関わっており、一つに習熟することで次のテーマにも良い効用をもたらすことが多々あります。大切なことは満足しないこと、そして常に自分自身が進化しうる柔軟性を持ち合わせることで私とおもいます。

卑近な話で恐縮ですが、先日、娘の中学校の入学式に出席しました。そこでの校長先生の講話には、かのカーネル・サンダースがはじめ電車の車掌、次いで軍隊に入り、除隊してからはガソリンスタンド勤務の傍ら利用客からの言葉がきっかけでカフェを開き、そこで出したチキンが有名になり現在のケンタッキー・フライドチキンとなっていたこと、またこちらもかの有名なアップル社を創業したスティーブ・ジョブズがリード大学在籍時には必修科目を履修することを嫌がり結果中退したも

の、学内で出会ったカリグラフィやデザインの美しさに惹かれ、これが後のアップル・コンピュータの構想に役立ったこと等々の話でした。有名な「点と点をつなぐ」というあの話です。

校長先生の話は続きます。「だから・・・今もしそれをする意味が無いと思ってもそこで立ち止まっではいけません。今やっていることがいつ将来に影響を及ぼすかは分からないからです」と。

その話にはいたく共感を覚えたのですが、同時に私は思いました。これは今やるべきことではないのではないかと思えばそこから一旦離れることも大切である、もつと自分の人生を良くしたい、無駄にしたくない、その気持ち忘れずに常に考えて歩み続けたからカーネル・サンダースやステイブ・ジョブズのように最終的に点と点をつなぎ、大成することができたのではないかと。

大切なことは満足しないこと、そして常に自分自身が進化しうる柔軟性を持ち合わせることでであると私はおもいます。

谷繁強志 先生



形稽古と乱取稽古

真理のもとでは皆平等であり、真理を追求することは自由で妨げられるものではありません。合気道家としての真理は、理合。合気道家として、理合を研究し、それを追求し、身につけることが日々の鍛錬、稽古と言えるでしょう。

技は形だけなぞらえているのではなく、本当にかかるのか？本当にかかるとはどういうことか？その研究が理合の研究です。逃げることであれば逃げる。抵抗することができれば抵抗する。そのような相手を無力にできるかどうか？試行錯誤しながら、研究します。逃げたり、抵抗したりする相手に技をかけていく、その試し合いをする手段として乱取稽古があります。いきなり乱取と言っても、技の本質、すなわち理合を身につけるのは難しいものです。だから相手の動きに制限を加える形稽古が必要になります。まずは形稽古から入って、技の理合を学び、鍛錬する。形稽古は実践を想定して行わねば

無効な技を身につけることになります。実践と言っても、想像するのは容易ではないので、乱取稽古を想定すれば良いのです。自分の捌き、技に対し、自由意思を持った相手ならどう対処するのか、それを想像しながら、すなわち、乱取稽古を想像しながら、形稽古をしましょう。形稽古の後には、乱取稽古、そして乱取稽古の中で自分なりの問題点を見つけ、課題を設定します。その課題を形稽古として繰り返し、鍛錬します。鍛錬した結果を乱取稽古で試してみましょう。自分の体捌きに対応して相手はどう反応するのか？相手の動きを導き出せる体捌きになっているのか？相手に隙を与えていないか、相手の隙をついているか？はたまた、相手の隙を作る捌きができていないか？力まず、脱力の威力を発揮できているのか？

約束稽古である形稽古では、スムーズにできても、相手が自由意志で動けるとなると途端に冷静さを失い、力んでしまい、技がかからなくなってしまう。

合気道は、自分の心と体を制御して、相手を制御する究極の武道です。形稽古の中だけでなく、乱取稽古の中

でも自分の心と体を制御できるよう日々鍛錬しなければなりません。

アンケート

『日常と合気道の結びつきについて』

平和な現代社会において、武道のフィジカルな部分が日常と結びつく場面は多くない・全くないと言っても良いでしょう。やはり日常と結びつくのは精神的な部分、心の部分ではないでしょうか？

合気道の技を繰り返し出す際に脱力が重要な要素ですが、脱力は、相手の力に逆らわず、相手の力そのものや動きの方向を利用して相手を制御するものです。この考え方を心に当てはめ、相手とのコミュニケーションにおいて活用します。相手の意思を汲み取り、相手をねじ伏せようとせず、反発せずに、自分の考え・意思に融合させるよう導いていく、合気道で脱力をする要領でコミュニケーションをとると、円滑・円満な関係が生まれます。中々

容易ではなく、鍛錬が必要です。心の脱力を日常の稽古として精進します。

宇田川哲哉 先生



所感 全日本学生合気道連盟への期待

今年は、全日本学生合気道連盟設立六十五周年の記念の年に当たると思われる。設立六十周年から今年までは、新型コロナウイルスの蔓延により、活動できない事態にもなったが、その後それを乗り越え、活動を続けてこられたのも、歴代委員長始め連盟委員各位の尽力の賜物であらう。

今年も合同合宿、演武大会等々盛大に実施されていることは同慶の至りである。

私は本年も三月に合同合宿に参加することができた。私は、一年の間でも連盟所属の学生と会うことができるのは、この合同合宿と演武大会くらいしかないのであるが、武道を志す学生諸君の元気な姿に接することができた。

私の担当の稽古の前には、学生のみ交流稽古が行なわれたと聞いた。私が学生の頃には合同合宿では、主将

演武とともに必ずスケジュールに入っていたものだが、近年は行われておらず、久し振りに実施されたものとのこと。各大学合気道部の主将が交代で見本を示し、各参加者が入り交じり稽古を行ったようである。日頃同じ部員の中だけで稽古している参加者が、それぞれの部に伝わる実技を学ぶ機会は非常に貴重なものである。また、他大学の学生とともに汗を流すことは各校の相互理解にも繋がるものであり、一年に一度であっても続けていけると良いであろう。

演武大会についても、過去の実施例を振り返り、見直すべきところは見直していくことをお勧めする。

学生合気道演武大会でありながら、学生自身の演武が少なすぎるのではないかというのが私の感想である。昨年のプログラムを拝見したところ、学生の演武は、各校演武と主将演武のみであったと記憶している。それに対して、招待演武や師範演武に結構な時間がとられている。運営時間に制約があるとしても、これでは誰のための演武会か分らない。できるだけ学生一人ひとりが充実し

た演武を行えるよう工夫されるとよいだろう。

初代亀井静香委員長以来歴代委員は、「学生の学生による学生のための連盟」運営を続けてこられている。今後も、その設立時の精神を崩さず引き継いでいかれるよう心から期待している。

アンケート

『日常と合気道の結びつきについて』

合気道は、日本のみならず、世界中に広まっているが、合気道というものを説明するのは難しい。剣道は剣を使い、弓道は弓矢を使う。柔道は柔（やはら）であり、徒手で相手を投げたり押さえつけたりする。では、合気道の「合気」とはどのように説明したらよいのか、柔とはどこが違うのか。「相手の氣に合わせる」や「天地の氣に合わせる」などと語られることがあるが、抽象的である。『一刀流兵法箇条目録』の第八箇条に『松風之事』とい

う条目がある。

松風之事

松風とは、合氣をはずせということなり。松に風あれば、さわさわして常に合氣なり、合氣にはずれねば、よきかちにあらず、弱きに弱き、石に石、綿に綿の如し、打合して勝負見えず、是に依て当流は拍子の無拍子と打なり、敵弱からん所を強く、強からん所を弱く敵星眼（せいがん）に來れば下段にして拳下よりせめ、敵下段なれば星眼にして上太刀におさえという様に、合氣はずれて勝ちあるべし、風ならば松をたおし、乗取りて勝つ、松ならば風のはげしく来る所をさけ通して、その虎口の間に然も勝あるなり。

昔の武人は「合氣宜しからず」というように必ずしも合氣をあまり良い意味では使っていないかったようである。「松風之事」では、合氣とは氣がぶつかっている様子を現している。

そこで、日常生活の対人関係や交渉事に於いて、意見の相違や対立が生まれるところで如何に合氣を外して

いくか、が大切なのではないかと考える。そこに合氣道の稽古が生かされてくるのだと思料する。

三、 加盟校紹介

金沢大学



主将作文 千代伸明

まず始めに、日頃より金沢大学体育会合気道部の活動に御理解と御尽力をいただいております先生方、又、このような機会を与えてくださった全日本学生合気道連盟の皆様方に心よりお礼申し上げます。

私が合気道部に入部したきっかけは新歓活動のビラ配りです。私が入学した時はまだコロナが流行していましたが、とても新歓活動が活発で多くのビラをもらいました。ビラにキットカットを付けたら、履修登録のアドバイスをしたりと多くの部活動が自分たちの部活動が一番印象に残すための工夫をしていました。合気道部は新入生に「10秒で技かけるので見ていてください!」と他とは全く違う声のかけ方をしていました。これのおかげで、演武会に見学し、合気道に興味を持つことができました。

金沢大学合気道部で二年間合気道をしていると、否が応でもすごい人に会います。なぜこの人は平和な日本

で普通に生活しているのか、時代が違えば、歴史に名を残していたのではないかと思う人に会います。このような人たちに会おうと合気道部に入ってよかったと実感できます。

幹部としての活動が始まって三か月ほどが経ちましたが、全体をまとめることはとても大変だということをしみじみ感じています。演武会や昇級昇段に向けた練習内容の調整がうまくいかなかったり、各行事において下級生への指示がうまく通らなかったりしました。下級生に目を向けすぎると、自分たち幹部の演武の完成度が低くなったり、稽古内容等に注力しすぎると、外部との連絡が遅れたりどこかを修正すると、他のどこかで問題が起きてしまいます。自分の計画性のなさや指示の曖昧さを深く痛感しています。今まで幹部としてやり遂げられた先輩方はすごいです。まだ折り返し地点に達してさえいないので、この先多くの行事があります。部のリーダーとして同じ失敗を繰り返さないよう気を付けたいと思います。主将は責任が大きな役職である分、やり切ったときの達成感のある役職だと思うので、今後も頑張

つていきたいと思っています。

部紹介

一、部の正式名称 金沢大学体育会合気道部

二、創部年 1977年

三、部役員

師範	村角美登
部長	満保雅浩
監督	坂井健一
コーチ	坂田信和
	三木崇
主将	千代伸明
副将	中村有貴
主務	若生結衣
副務	西原彰人
会計	坂下さくら
渉外	諸江咲哉

四、部員数 総勢…24名(男…19名、女…15名)

一年生…12名

二年生…10名

三年生…6名

四年生…6名

五、稽古時間

月曜日…19時	〃 21時
水曜日…19時	〃 21時
木曜日…18時30分	〃 21時
土曜日…13時	〃 15時30分

六、道場名 角間キャンパス 体育館第五体育室

(柔道場)

七、道場の広さ 144畳

八、年間行事 一月 寒稽古

二月 追いコン

三月 春合宿

四月	新歓演武会
五月	確定新歓
六月	新歓稽古
	富山大学合同稽古①
七月	北國演武大会
八月	夏合宿
九月	
十月	東京遠征
十一月	50周年行事
十二月	富山大学合同稽古②

近畿大学



主将作文 井上竣介

近畿大学体育会合気道部は部員数が比較的少ないですが、その分和気藹々と日々稽古に取り組んでいます。稽古内容としては基本動作と形稽古を中心に取り組み。乱取り稽古につなげていくようになっていきます。学生大会や社会人大会、昇級審査が日々の稽古のモチベーションとなっており、ほとんどの部員が合気道未経験ではじめておりますが、技の動きがスムーズになったり、自信をもって技をかけられるようになったりと、一步一步少しずつ成長できていると感じます。

稽古の環境は整っており、普段の稽古は学生のみで行っていますが、時折、先生に大学の道場へお越しいただき、技の理合いだけでなく、大会に向けた練習を指導していただき、基礎の部分や学生だけではわからない新たな気づきを得られ、視点や意識を変えられるいい機会となっております。また、コーチやOB・OGの方々から、主に演武や乱取りについて練習を見てくださり、時

に練習相手になってくださり、技術面だけでなく、気持ちの部分でも指導いただき、本部道場では他大学の学生や一般の方々といつもと違う環境で先生に指導いただき、良い刺激となっています。

部員のポテンシャルも高く、去年の関西学生大会では男子乱取り団体で優勝したり、全日本学生大会では男子個人戦で優勝するなど好成績を残しております。日々の稽古の成果が結果として現れると、今後の稽古のやる気につながり、ほかの部員も負けじと頑張れると思います。昨年は天理大学で世界大会も行われ、近畿大学からも出場させていただきました。海外の方々の熱量もすごく、普段試合することのない方と試合することができたのはいい経験となったと思います。

形稽古は主に昇級審査に向けて行っており、繰り返し技をかけることによって上達を目指しています。黒帯の学生が少ないため、技を受けながら教えることがあまり十分に行えませんが、先生やコーチにもご協力いただきつつ、技を身につけております。

コロナ禍でどうしても活動が厳しくなった時期でも、

できる範囲で先輩方やコーチ、先生にご指導いただき、つないできた部分もあるので、制限なく稽古できることに感謝して、大会や昇級審査に臨みたいです。今後も部員同士で教え合い、切磋琢磨しながら、先生、コーチ、OB・OGにもご指導いただきながら、稽古に取り組みしていきます。

部紹介

一、正式名称 近畿大学体育会合気道部

二、創部年 昭和40年

三、部役員 師範 成山哲郎

部長 道野真弘

監督 伊藤博樹

主将 井上竣介

主務 笹山睦

四、部員数 総勢…11名(男…6名、女…5名)

一年生…1名

二年生…4名

三年生…5名

四年生…1名

五、稽古時間

火曜日…17時

〃 20時

木曜日…17時

〃 20時

金曜日…17時

〃 20時

六、道場名 スポーツ振興センター3F 道場

七、道場の広さ 80畳

八、年間行事

一月

卒業生送別会

二月

春合宿

三月

新生歓迎会

四月

関西学生合気道競技大会

五月

夏合宿

六月

全日本学生合気道競技大会

七月

関西合気道競技大会

八月

九月

十月

十一月

十二月 関西学生合気道新人競技大会

国士舘大学



主将作文 酒井花菜

大学に入学するまで、私にとっての合気道は母が習いたかった護身術でした。大学で新しいことを始めたかった私は母の勧めで合気道部に体験に行き、思っていたよりも運動量が多く楽しかったため、入部することを決めました。

コロナウイルスが蔓延していたため私は1年生の9月から活動を始めました。高校3年生の時の陸上の総体が中止になってしまわずと不完全燃焼だったことに加え、元々運動が大好きだったのでとても熱心に稽古に励んでいました。その後10月の全日本大会に演武で出場させてもらうことになり、私はそこで演武の楽しさを知り、乱取りにもとても興味が湧きました。今思えば、下級生の頃は自分のことに必死でした。当初は体育教師を目指していたため、就職までに何か結果を残したいという考えがあったことや、合気道では陸上の時のような後悔したくないという気持ちが強かったのだと思います。

す。しかし、コロナウィルスの流行も落ち着き、後輩たちも加わり活気あふれる部活になっていくにつれて、私の中で自分だけでなくみんなで目標に向かって努力することがとても楽しく感じるようになりました。また上級生になってからは、東日本学連幹事長や主将などの役職をいただき部活動の運営について考えることが多くなりました。

特に主将という立場は私が社会人になる前に経験することができて本当に良かったと感じています。主将としての私の目標は、一人一人が自分の練習に一生懸命になれて、学年関係なくみんなでより良い部活を作っているような環境を作ることでした。私だけでは決してできなかったことも同期がいつも支えてくれて、後輩たちがいつも助けてくれたからこそここまでやってこられました。一人一人の目標と部としての目標をどちらも達成させることの難しさは常を感じていましたし、みんなの要望や期待に応えることも、部活にとって良い主将になることができた自信もあります。それでも支え続けてくれた部員にはとても感謝しています。主将の仕事にお

そらく正解はないですが、部活をより良くしていくために考え続けるということは求められていることの中でも大事なことの1つなのではないかなと思います。後輩たちなら、今後の部活動を今よりも更に良いものにしていくてくれると思います。

最後になりますが、4年間合気道を教えてくださった大森先生や成山先生をはじめとする先生方、先輩方、同期のみんな、後輩の皆さん、本当にありがとうございます。皆と大学で合気道に打ち込んだ時間は私にとって宝物です。合気道で培ったことを活かし社会人になっても粘り強く頑張りたいと思います。

部紹介

一、部の正式名称 国士舘大学合気道部

二、創部年 1963年

三、部役員

師範 成山哲郎

部長 河野寛

監督 大森竜一

主将 酒井花菜

副主将 大重心愛

齋藤美音

舩谷咲

主務 岡田太陽

会計 菊池遼

学連 佐藤羽瑠

渉外 高橋祐希

四、部員数 総勢…29名(男…12名、女…17名)

一年生…9名

二年生…8名

三年生…7名

四年生…5名

五、稽古時間

水曜日…18時05分～19時35分

木曜日…17時30分～19時

金曜日…19時45分～21時15分

土曜日…11時～13時

六、道場名 町田キャンパス 第3剣道場

世田谷キャンパス MCH2階柔道場

七、道場の広さ 200枚(町田キャンパス)

150枚(世田谷キャンパス)

八、年間行事 一月 寒稽古

新春稽古会

二月	昭道館フエスティバル
三月	大学春合宿
	連盟合宿
	昇級昇段審査会
四月	
五月	
六月	東日本大会
	関西大会
	昇級昇段審査会
七月	新入生歓迎会
八月	大学夏合宿
九月	東日本新人大会
十月	全日本学生合気道競技大会
	演武会
十一月	
十二月	関西新人大会
	昇級昇段審査会

上智大学



主将作文 梅本仁恵

上智大学合気道部第62代主将の梅本仁恵です。私は昨年の夏から主将という大役を引き受けることとなり、自分の至らなさを感じつつも、先輩後輩、同期のサポートのもとでなんとか取り組ませていただきました。この場をお借りして、支えてくれた人たちへ感謝を述べさせていただきます。

上智大学合気道部は今年度より3人の新入部員を迎え、総勢11名で稽古を行っております。4年生の代がおらず、3年が幹部として部を運営させていただいておりますが、OB・OGの先輩方の心強いご支援や頼りになる後輩たちに支えられているのを日ごろ実感しております。指導面においてOB・OGの先輩のお力添えをいただけることは我々にとって非常にありがたいことであり、また後輩もより技術を磨く機会に恵まれていることだろうと感じております。今年の6月末には昇級審

査が行われ、後輩の成長を感じるとともに、自身もさらに精進していかなければと身の引き締まる思いでした。夏休みには夏合宿を予定しておりますが、部員一同切磋琢磨して稽古に取り組んでいきたいと考えております。

昨年は夏合宿時に異例の幹部交代が行われ、右往左往しながら部の運営に取り組ませていただきました。当合気道部はたくさん年間行事があり、7月には上南戦、8月に夏合宿、10～11月にかけていくつかの演武大会に出場します。また、6月と12月に審査の時期を迎え、ここで日ごろの稽古の成果を評価していただきます。これらの行事に向けて稽古のスケジュールを組んだり、他団体とのやり取りを行ったりしてきましたが、慣れないことで苦労も多かったと感じます。後輩や先輩方、他団体の方に苦労をおかけしてしまったことも数知れませんが、知らないことを多く学ばせていただいた1年だったと思っております。幸いにしてか、もう1年運営に携わらせていただくため、今年度はよりスムーズで効果的な運営を行えたらと考えております。

62代と長く続いてきたこの合気道部に少しの間で

すが関わることができて非常に良かったと感じています。最後にはなりますが、改めて今までご支援いただいた人たちに感謝いたします。ありがとうございます。今後ともぜひお付き合いよろしく願いました。思います。

部紹介

一、部の正式名称 上智大学体育会合気道部

二、創部年 1961年

三、部役員 師範 千田務

主将 梅本仁恵

主務 藤川綾乃

渉外 長谷川廉

四、部員数 総勢…11名(男…7名、女…4名)

一年生…3名

二年生…5名

三年生…3名

五、稽古時間

月曜日…18時

水曜日…18時

金曜日…18時

〽20時

〽20時

〽20時

土曜日…14時

〽17時

六、道場名 地下柔道場

七、道場の広さ 不明

八、年間行事

一月 オフシーズン

二月 春合宿

三月

四月 新入生歓迎

五月 OB総会

六月 審査

七月 前期納会

上南戦

オフシーズン

八月 夏合宿

九月

十月

十一月 演武大会等

十二月
後期納会
審査

成城大学



主将作文 宮下遥貴

成城大学合気道部の部長を引き継いで9カ月がたちました。今思い返してみると時間の流れがとても速く感じます。主将作文を書く際に、部活でもとお世話になった千葉主将の文章を読ませていただきました。コロナの影響で崩れかけた部活をここまで立て直した先輩方の功績はとても大きく、感謝の気持ちと尊敬の念を改めて抱くと共に、私は先輩方と比べて技術面、部の運営の面など様々な面において劣っていると感じました。具体的には明確な目的意識をもって活動を行う点において大きく後れを取ったと考えています。そのため体裁を気にしたうわべだけの行動を改め、課題の分析と明確な目標設定をしっかりと行い活動をしていこうと思いました。

私は先輩から部活を引き継いでからの9カ月間、部活動としての組織基盤作りを重点的に行ってきました。内

容としては部活開始時間の決定、体操から単独動作などの基礎練習までを全員で行い、足並みがそろいやすくなるようにしたことなどが挙げられます。これらの基盤作りによつてよりメリハリをつけることができ、練習の始めから終わりまで集中して活動を行うことができるようになりました。

一方で今後の部活で取り組んでいきたいこととしては、部員全員が部活に対してそれぞれ持っている考えや目的を統一していくことが第一に挙げられます。部員それぞれ違う考え方を持っており、自分にとっては正しいと思ったことが、必ずしも周りとは限らないことを知りました。そのため部員全員がそれぞれの考えの違いを理解した上で、部活がより良い方向に向かうように柔軟な対応をしていく必要があると思います。今後の部活では全員が集まって話し合う場を月に何度か作りたいと考えています。

私は一つ上の代がないこともあり2年間主将としての役割を果たさなければなりません。先述したように、コロナを乗り越えて立て直された部活を基盤がしっか

りとした状態で次の代に引き継ぐことが私の役割であると考えているため、そこまで行きつくために、もう一度細かい目標を確認しコツコツ日々努力していこうと思います。終始まとまらない文章ではございますが主将作文とさせていただきます。

部紹介

一、部の正式名称 成城大学合気道部

二、創部年 1963年

三、部役員 師範 成山哲郎

監督 小松正治

主将 宮下遥貴

主務 山崎愛生

会計 大野蒼依

四、部員数 総勢…12名(男…4名、女…8名)

一年生…5名

二年生…2名

三年生…5名

五、稽古時間

火曜日…16時45分～20時

水曜日…16時45分～20時

木曜日…16時45分～20時
土曜日…10時
日曜日…10時
～13時

六、道場名 大道場・第二道場

七、道場の広さ 93畳(大道場)
55畳(第二道場)

八、年間行事 一月

二月 春合宿

三月 昇級・昇段審査

四月

五月

六月 関西大会

東日本大会

昇級・昇段審査

七月

八月 夏合宿

九月	新人大会
十月	昇級・昇段審査 全国大会
十一月	四大戦 日本武道館演武会
十二月	昇級・昇段審査

専修大学



主将作文 秋本壮太

こんにちは。専修大学体育会合気道部主将の秋本と申します。今年度で3年目の主将、3度目の寄稿をいたします。私たちが入部したころは、新型コロナウイルス流行の真っ只中で、先輩がほとんどいない中でのスタートでした。部の再建を目指した、3年間、現在は数年ぶりに4学年が揃い、27名で精を出して活動しております。

合気道の技術についてはもちろん、武道についても考える機会が多くありました。様々な意見もあるかと思いますが、武道とは、人生に焦点をあてたものであると思います。たんにその場の技術というよりも、長く深く鍛錬していくものです。礼儀もその一つで、スポーツマンシップとはまた違った、生死を前提とした敬意とやりとりがそこにはあるかと思っています。

専修大学体育会合気道部には部訓があります。

一、部員はいかなる理由ありといえどもその礼を重んずること

一、部員は自己に責任を持ちさらに大きく部愛に生きる

こと

一、部員は心身ともに健康であること

一、部員は青年の新しき情熱を持つて絶えず研究心旺盛なること

一、部員は広く調和の精神を抱き事を構うること

以上の5つです。これは武道人として、もっと広くは人格者としての一つの指標になるものが記されていると思います。一つ目は先ほども話した通り、いつ何時も、命のやり取りを意識するからこそその行動であると思います。もつと言えば、武道をする以前の大前提です。二つ目は、他責思考にならないことであると自分は解釈し、また自分の行動の影響力を鑑み、節操ある行動をするにとだと思っています。他責思考になると自分の行動の基準が他人になってしまいます。武道でいえる中心のない状態と言えるでしょう。自分の影響力とはなにも大きな話で

はなく、例えば自分のふとした一言、表情で相手の不快を決めてしまうといった小さなことです。全ては無理でもそういうことから自分も持つて意識して行動することが、相手への礼、部の好環境にも繋がります。三つ目は心身のつながりを明言しています。根性で身体動く！みたいな時代錯誤なことを言うつもりは毛頭ありませんが、やはりその間に関係がないとは武道をやっている上では言えません。例えば気合を出すということ。腹、呼吸、気概が一点に揃う瞬間を狙う気合。これも心身の統一による力と言えるでしょう。四つめは言わずもがな初心忘れるべからずですが、ポイントは「青年の」という箇所でしょう。青年としてのハングリーさ無垢さは自分像が固まってしまった時こそ、思い出したいものです。五つ目は、柔軟性。武道でもやわらという言葉もあります。ただ受け入れるのではなく、調和が大事です。これはある種これまでの総括でもあるかのようにも感じます。

長らく語りましたが、もちろん全てを総て実践することとは困難です。しかしそれを部活という団体で実践する

と、少しずつ実がむずばれていくと思います。

改めて、部員の皆さん3年間ありがとうございました。

武の日々の微々たる実践が大きを成すと思います。専修
大学体育会合気道部を今後ともよろしくお願い申し上げます。

部紹介

一、部の正式名称 専修大学体育会合気道部

二、創部年 1957年

三、部役員 師範 堀越祐嗣

部長 石崎徹

監督 小谷田洋一

主将 黒沢勇斗

副将・統制 横道穂里

主務・会計 葛西萌恵

渉外 平田実紗希

広報 木田恭誠

幹事長 近藤怜

新歓・鳳祭 大橋紘子

四、部員数 総勢…19名（男…9名、女…10名）

一年生…9名

二年生…7名
三年生…3名

五、稽古時間

月曜日…	13時	～	14時30分
火曜日…	18時15分	～	19時45分
水曜日…	15時30分	～	17時30分
木曜日…	18時30分	～	20時
金曜日…	14時50分	～	16時20分
土曜日…	15時30分	～	17時
日曜日…	13時	～	15時
月曜日…	18時	～	19時30分
火曜日…	14時30分	～	16時30分

六、道場名

生田キャンパス 総合体育館柔道場
千代田区スポーツセンター 柔道場
明治神宮 武道場至誠館
神田キャンパス 第3体育室

七、道場の広さ

約204畳（生田キャンパス）
約198畳（千代田スポーツセンター）
約156畳（明治神宮武道場至誠館）

八、年間行事

一月	寒稽古
二月	強化練習
三月	春合宿
四月	連盟合宿
五月	新歓活動、 新入生歓迎会
六月	新歓合宿
七月	
八月	強化練習
九月	夏合宿
十月	連盟演武大会
十一月	鳳祭（文化祭）
十二月	昇段・昇級審査 稽古締め

中央大学



主将作文 田中優美

「頑張るけど、頑張りすぎない。」これは、私が4年間の合気道を通して学んだことの1つである。

大学に入学した時から合気道部に入学しようと考えていた私は1年生の頃から週5、6日大学の稽古に参加していた。私は中学高校で剣道部に入っており、同じ地区の決勝戦でいつも勝てずに毎回2位だった悔しい経験があった。心のどこかで大学では勝ち負けの競技からは離れたいと思っていたのかもしれないが、中央大学合気道部は他の競技とは違い試合がなかったため勝ち負けを決める必要がなく、部活を見学した時から頑張れば頑張るほど自分の実力になりそうだと感じた。また、勝負がある競技では、必ずしも努力量に比例して勝つことができるわけではないが、勝負のない合気道ならば悔しい思いをせずに続けることができ、負けず嫌いな私に向いていそうだった。

入部して毎日稽古をするにつれて初めはよくわから

なかった動きができるようになるにつれて合気道がどんどん楽しくなり、稽古があれば必ず参加していた。しかし、入部時にいた私の同期は様々な理由で辞めてしまい、2年生に上がる頃には同期は半分の4人となり、現在私の同期はいなくなってしまった。当時の私は自分が上手くなればいいと思っており、稽古には一所懸命励んでいたがその分視野が狭くなり、周りとの関わりを疎かにしていた。今振り返ると同期にもっと寄り添い声をかけていれば違う結果があったのではと反省する部分も多々ある。この経験を通して私は、合気道を上手くより強くなるためには誰にも負けないくらい一所懸命に稽古に励むことは必要であるが、決して自分だけが頑張れば良いわけではなく、部活動の中で稽古をする限りは周囲との関わりの中で自分が頑張るところ、周囲の人をよく見て一緒に頑張る必要があるということを学んだ。

私は来春から社会人として働き始めるが、合気道を通して学んだ「頑張るけど、頑張りがすぎない」という気持ちを活かしたいと思う。社会人1年目は右も左もわからないままがむしゃらに仕事をする事になると思う

が、最初からエンジン全開で飛ばしてしまうと体だけではなく、心も疲れてしまうだろう。仕事に対して責任を持ちつつも、1人で対処できないことは周りに頼り、周囲との関係性を大切に仕事に携わりたい。今後は合気道を通して学んだ多くのことを糧に、引退までの残りの合気道生活や社会に出た際にも活かして活躍できる人になりたいと思う。

部紹介

一、正式名称 中央大学学友会体育連盟合気道部

二、創部年 1958年

三、部役員 師範 宇田川 哲哉

部長 堀内 恵

監督 山ノ井 和哉

主将 田中 優美

四、部員数 総勢…39名(男…17名、女…22名)

一年生…22名

二年生…5名

三年生…11名

四年生…1名

五、稽古時間

月曜日…17時30分～19時30分

火曜日…8時30分～10時20分

六、道場名 多摩キャンパス 第一体育館二階合気道場

七、道場の広さ 110畳

八、年間行事

水曜日…13時～15時

木曜日…8時30分～10時20分

金曜日…18時30分～20時30分

土曜日…17時～19時

一月

春季合宿

二月

連盟合宿

三月

二十大学合同稽古

四月

新入生歓迎演武

五月

新入生歓迎合宿

六月

前期昇級・昇段審査

OB総会

七月

前期納会

八月

九月	夏季合宿
十月	全日本学生合気道連盟演武大会
	五大学合同稽古
十一月	白門祭演武
十二月	後期昇段審査
	OB合同稽古
	後期納会

東京大学



主将作文 山口耕平

東京大学運動会合気道部主将の山口です。この度は連盟誌に寄稿させていただきありがとうございます。主将と申し上げましたが、これを書いているのは、引退の2週間前ですので、連盟誌が発行される頃にはもうOBとなつているかと思っています。引退の直前に書いたというところで今までの連盟での思い出について軽く振り返りたいと思います。

私が主将になって初めての行事は去年の連盟演武大会でした。一昨年はスタッフとしての参加でしたので演武には出ることはなく連盟での最初の演武が、主将演武となりました。同時に主将として演武を他の人に見せるのもこれが初めての機会であり、今思い返すとても緊張していました。終始呼吸が上擦っていたように思います。映像を見返すと呼吸が落ちていないのでその分腰も高く、組太刀をやったのですが、剣が高くなってしまいました。その後体術をやりましたが、これはこれで緊張

からくる焦りがでてしまい、一つ一つの技が雑になってしまいました。もつとどつしりと構えて相手全体に眼を向けるということが全然できていなかったように思います。稽古ではできていることもいざ場所が変わるとこれほど体が動けなくなるのだと実感しました。また、主将と言っても自分もまだまだであると思いました。とはいえ、主将になったばかりの自分が日本武道館のような大きな会場で大勢の前で演武を披露できたのはとてもいい経験になりました。最初に連盟で演武できたことで、それから何度も演武をする機会がありましたが、この時ほど緊張することはありませんでした。

連盟といえbaumう一つ大きな行事として連盟合宿というものがあります。連盟合宿では他大の師範の方から稽古を受けることができました。普段たまに他の大学とは合同稽古を行っていますが、それらはすべて学生だけで行うことが基本で、他の大学の師範の方の稽古を受けるのは一年でも連盟合宿くらいです。連盟合宿での稽古はとても貴重な体験になりました。自分の大学でやっていることと全然違うことを稽古している大学もあり、新

鮮でした。また同時に、全然違うことのように見えて実は同じことを言っているという点もあり、それらを稽古の中で自分で見つけていくというのがとても楽しかったです。合気道は色々な流派がありますが、こういう時に流派がたくさんある面白みを感じられます。

連盟演武会、連盟合宿ともに自分は連盟でたくさんの貴重な経験をさせていただきました。連盟での交流は多くのものをもたらしてくれていると思いますので今後も運営の方は大変かと思いますが、楽しんでいただけたら幸いです。最後になりましたが、東大合気道部としても今後とも連盟の発展に尽力していきますので、よろしく願います。

部紹介

一、正式名称 東京大学運動会合気道部

二、創部年 昭和29年

三、部役員 永世師範 故田中茂穂

名誉師範 稲葉稔

山田高廣

師範 堀下直人

コーチ 朽名英明

部長 能智正博

主将 山口耕平

主務 久富健至

四、部員数 総勢…35名(男…24名、女…11名)

一年生…11名

二年生…10名

三年生…6名

四年生…8名

五、稽古時間

月曜日…12時10分～12時50分

火曜日…12時10分～12時50分

水曜日…12時10分～12時50分

木曜日…12時10分～12時50分

金曜日…12時10分～12時50分

土曜日…12時10分～12時50分

土曜日…10時～12時

土曜日…10時～12時

土曜日…10時～12時

土曜日…10時～12時

六、道場名 駒場キャンパス 第一体育館武道場

本郷キャンパス 七徳堂

七、道場の広さ 約182畳(駒場キャンパス)

約182畳(本郷キャンパス)

八、年間行事

一月	寒稽古
二月	二月強化練習
	検見川合宿
三月	連盟合宿
四月	新歓演武会
五月	五月祭演武会
六月	六月強化練習
七月	
八月	夏合宿
九月	九月強化練習
十月	連盟演武大会
十一月	駒場祭演武会
十二月	十二月強化練習

富山大学



主将作文 小谷田琉聖

「再出発(第二章)」

今年度から富山大学体育会合気道部の第53期主将を務めさせていただくことになりました、小谷田琉聖と申します。昨年度の11月の全日本学生合気道演武大会や3月の連盟合宿ではお世話になりました。

当部はコロナ禍による人数の大幅減少や活動制限などによって、一時は存続の危機にありました。しかし当時在籍していた先輩方の尽力や師範やOB OGなどの方々の惜しみのないご協力によって、何とか持ちこたえることができました。さらに昨年度からは部員数の増加や活動制限の撤廃などもあり、少しずつではあります但体制の立て直しがされてきました。

そのような中で主将となった私は、第52期主将の昨年度の主将作文「再出発」から拝借して、「再出発(第二章)」をテーマに掲げて主将としての働きを意識してき

ました。つまり、今年は昨年先輩方が掘り起こしてくださった諸々のモノに加え、その他過去に残っていたモノや新しいモノをかき集め、取捨選択したモノを材料として次世代に繋がる土台を作り直すこと。これがこの渦中の主将である私の責務であると考えてみたのです。しかし分かっていることではありますが、数十年の積み重ねのノウハウが一旦途切れて分からないこともまだまだ多く、今年は特に3年生が自分1人しかないこともあって、「自分が何とかしなければいけない」という感覚に常に追い回されているような状態でした。それでも少しずつでも目標を進められているのは、間違いなく周囲の方たちの温かな言葉や協力によるものであったと上半期を振り返った今になって思うようになりました。

そういった意味で「再出発(第二章)」という題名は部全体の変化と個人的な主将としての在り方の変化を表したものです。部としても個人としてもまだまだ未熟なところも多いですが、少しずつでも着実に進み、その進んだ結果がそれぞれにとって良い未来になることを祈りながら締めとさせていただきたいと思います。

結びとなつてしまいましたが、今後の皆様のご活躍と交流の継続をお祈りしております。

部紹介

一、正式名称 富山大学体育会合気道部

二、創部年 昭和45年

三、部役員 師範

長井忍

部長

宮一志

監督

名古屋孝之

主将・主務

小谷田琉聖

副将

平岡佑己

会計

童以清

O B O G 連絡

清水昭伸

広報

本名ほのか

四、部員数 総勢…13名(男…9名、女…4名)

一年生…6名

二年生…4名

三年生…1名

四年生…2名

五、稽古時間

火曜日…18時30分～20時30分

金曜日…18時30分～20時30分

土曜日…14時30分～16時30分

六、道場名 五福キャンパス 構内武道場

七、道場の広さ 140畳

八、年間行事 一月

二月 春合宿

昇級昇段審査

三月 連盟合宿

四月 新歓

五月 新歓コンパ

六月 金沢大学合同稽古

七月 北国演武大会

八月

九月
十月
十一月
十二月
東京演武
金沢大学合同稽古
納会

明治大学



主将作文 宮尾玲宏

「主将としての独り言」

今年度、明治大学体同連合気道部主将の商学部三年生の宮尾です。主将として連盟誌の寄稿文を書く事になりましたが、全くもって何を書けば良いのか分からないので、第四〇号から前年度の五一号までの歴代明大合気道部主将作文を読んでみました。そうしたら、どの号も凡そ合気道に関する事と、学生生活の振り返りについて書いてありました。自分も例に倣ってその二つを軸に書こうかと悩みましたが、現在三年生で、来年も連盟誌の主将作文を書く事になるでしょうから、その二つは学生生活最後になる年に書こうと思います。

今回は今自分が気にしている事を書きます。何を気にしているのかと言うと、自身の気の弱さです。自分が気が弱いなど感じる場面はいくつかあるのですが、合気道に関連する事とすれば、技をかける際に下を向きがちだ

という事と部の運営に関する事です。一番危機感を覚えている問題は部の運営です。部の運営について詳しく書くとするば、後輩に厳しく出来ないという事です。特段慣れ合っている訳ではありませんが、せっかく合気道、特にうちの部に興味を持って入ってくれたので、あまり険悪な雰囲気であって欲しくは無いという思いがあります。この様に書いていますが、もしかしたら、自分に自身が無いだけなのかも知れません。自分の技術力やリーダーシップに大いなる不信を抱いているのだと思います。この様な思いを払拭するには、やはり稽古しかないでしょう。稽古に励み技術を磨き、人間としても成長する。〇〇したい。という希望として書くのでは無く、言い切る事で少しでも自身にプレッシャーを与える。恐らく来年の自分も書く事に迷い、過去の連盟誌を見るにあたって、この文章も見るとでしょう。どうでしょう、有言実行出来ていますかね？今は来年の自分を想像する事しか出来無いと一瞬思ってしまったが、頭を使うだけでは無く、行動しないと駄目ですね。大した頭もありませんが。兎にも角にも、日々励みます。

自分の想いについては以上です。今回のこの駄文よりは良い文が来年は書けている事を願うばかりです。稽古に励み、人間としても成長出来ていれば、自ずと良い文が書けていることでしょう。来年の自分がどのような文を書いているのか、楽しみです。

部紹介

一、正式名称 明治大学体育同好会連合会合気道部

二、創部年 1969年

三、部役員 師範 栗山直規

向坂裕一

奥山英男

部長 井田正道

監督 西森雄大

主将 宮尾玲宏

主務 眞榮城玄規

四、部員数 総勢…15名(男…10名、女…5名)

一年生…6名

二年生…6名

三年生…3名

四年生…0名

五、稽古時間 土曜日…12時30分～14時30分

日曜日…13時～17時

六、道場名 和泉キャンパス 体育館

七、道場の広さ 約250畳

八、年間行事 一月 新年稽古会

二月

三月 春合宿

四月 新歓

五月

六月 新人大会

七月 春関

八月 昇段審査

九月

十月 夏合宿

十一月

秋関

十二月
昇段審査

早稲田大学



主将作文 原野剛成

なぜ、稽古するのか。

この問いは、案外難しい。思えば、我々は今、かけがえない大学生活を送っているのである。大学生活といえば、自由、酒、旅、友情、そして恋！夢あふれる青春の時なのである。が、何を血迷ったか、我々合気道部員は、週六日、日も届かぬ十七号館の地下で淡々と稽古に勤しんでいる。幼少期より武道に親しんできたわけでも、卒業後に合気道の技が活かされるわけでもなく、ただ稽古をしている。それは、なぜか。（部誌寄稿文より）

これは、私が部誌に寄稿した文の導入部である。主将を任せられ、まず取り組んだのは「稽古の目的をどこに置くか」であった。それが、今後の稽古方針の「軸」となり、部員の稽古に対する姿勢をつくる、と考えたからである。

まず思いつくのは、全国制覇や早慶戦優賞。これらは

客観的で明確である。しかし、本当にそれだけなのだろうか、という迷いが残る。次に、技術の向上。わざの鍛錬は、稽古の主眼であり納得感がある。だが、それだけなのか。

結局、同期とも相談し辿り着いたのは、稽古は「自分を変えるため」にやるものではないか、という結論である。数多のサークルがある中で、体育会合気道部に入部した当時を振り返れば、弱い自分、中途半端な自分、臆病な自分、そんな自分を変えたいという想いがあつたことを思い出す。地味でつらい稽古を続けることができるのも、ここで辞めては自分に負けた気がする、諦めたくないという想いがあつたからではないか。

だから、新体制では「己を磨く、互いに磨く」というスローガンを掲げた。単に勝利のために稽古するのではなく、これを通じて自分を磨いていく。それも、一人では厳しいから、みんなで切磋琢磨、叱咤激励しながら磨いていこう、という趣旨である。

新体制が始動してから約10ヶ月。我々の代も引退が

見えてきた。技術は劣っているし、稽古の質も全く十分ではない。刻々と大会が近づく中で大きな焦燥感とプレッシャーがある。だが、そんな時こそ「己を磨く、互いに磨く」の言葉を思い出し、稽古に向かう。

これが、我々が考えた稽古をする目的である。なぜ稽古するのかという問いに、唯一の正解はないだろうし、それぞれが違う想いを抱いているのだろうと思う。その違いも面白い。だからこそ、連盟に集まるみなさんにも聞いてみたい。

「あなたはなぜ、稽古するのですか」。

部紹介

一、正式名称 早稲田大学合気道部

二、創部年 1958年

三、部役員 師範 志々田 文明

佐藤 忠之

師範代 谷繁 強志

部長 加藤 尚志

監督 白岡 岳人

コーチ 熊澤 亮

金丸 駿

白石 尚之

安藤 翔

主将 原野 剛成

主務 荒川 将一

四、部員数 総勢…21名(男…12名、女…9名)

一年生…4名

二年生…8名

三年生…3名

四年生…6名

五、稽古時間 月曜日…17時 19時30分

火曜日…17時 19時30分

水曜日…17時 19時30分

木曜日…17時 19時30分

金曜日…17時 19時30分

土曜日…15時 18時

六、道場名 早稲田キャンパス

17号館地下1階合気道場

七、道場の広さ 168畳(7×24)

八、年間行事 一月 寒稽古

二月	勝浦連盟合宿
三月	二十大学合同稽古会
	春合宿
四月	新入生勧誘活動
五月	OB総会・新入生歓迎会
六月	関東学生合気道新人競技大会
	関東学生合気道競技大会
七月	前期納会
	昇級・昇段審査
八月	
九月	夏合宿
	全日本合気道競技大会
十月	早慶合気道定期競技会
十一月	関東学生合気道競技秋季大会
十二月	後期納会
	昇級・昇段審査

四、 加盟校連絡先

加盟校連絡先一覧（50音順）

大阪商業大学合気道部	577-0036	大阪府東大阪市御厨栄町 4-1-10
金沢大学体育会合気道部	920-1164	石川県金沢市角間町
関西福祉科学大学合気道部	582-0026	大阪府柏原市旭ヶ丘 3-11-1
京都産業大学体育会合気道部	603-8047	京都府京都市北区上加茂本山
近畿大学合気道部	577-0805	大阪府東大阪市宝持 3-33-35
国士舘大学合気道部	195-0052	東京都町田市広袴町 844
上智大学体育会合気道部	102-8554	東京都千代田区紀尾井町 7-1
成城大学合気道部	157-0066	東京都世田谷区成城 6-1-20
専修大学体育会合気道部	214-0033	神奈川県川崎市多摩区東三田 2-1-1
大正大学合気道同好会	170-8470	東京都豊島区西巢鴨 3-20-1
拓殖大学麗澤会体育局合気道部	193-0085	東京都八王子市館町 815-1
中央大学学友会体育連盟合気道部	192-0393	東京都八王子市東中野 742-1
帝京大学理工学部合気道部	320-0351	栃木県宇都宮市豊郷台 1-1
天理大学体育総部合気道部	632-0032	奈良県天理市杣之内町 1050
東京大学運動会合気道部	113-0033	東京都文京区本郷 7-3-1

東京医科大学体育会合気道部	160-0023	東京都新宿区西新宿 6-1-1
東洋英和女学院大学体育会合気道部	226-0015	神奈川県横浜市緑区三保町 3290
富山大学体育会合気道部	930-0887	富山県富山市五福 3190
明海大学合気道部	279-0014	千葉県浦安市明海 1 丁目
明治学院大学体育会合気道部	108-0071	東京都港区白金台 1-2-37
明治大学体同連合気道部	101-0062	東京都千代田区神田駿河台 1-1
横浜国立大学合気道部	240-8501	神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-1
早稲田大学体育局合気道部	169-0051	東京都新宿区西早稲田 1-6-1

全日本学生合気道連盟	102-0091	東京都千代田区北の丸公園 2-3 日本武道館学生クラブ
------------	----------	-----------------------------

五、 歷代幹部名簿

1期（昭和34年）			5期（昭和39年）			9期（昭和43年）		
亀井静香	東京	委	小沢 勲		委	川辺順一	明学	委
井上強一	中央		川上太一	中央	副	久和原凡生	専修	副
2期（昭和36年）			6期（昭和40年）			小林 茂	成城	副
若狭 博	中央		山本柳二	拓殖	委	田中明彦	中央	会
尾崎 駿	東京		7期（昭和41年）			森実邦明	早稲田	渉
倉田 出	東京		芦田利昭	専修	委	浜口清人	拓殖	総
3期（昭和37年）			金子正勝	明学	副	河内 永	東京	企
小林昭彦	中央		相原伝次	中央	会	大塚誠一	日本	企
小暮 登	東京		飯塚征毅	早稲田	会	10期（昭和44年）		
4期（昭和38年）			8期（昭和42年）			福本 強	専修	委
柳奥和浦	中央		西野 充	東京	委	藤平忠則	中央	副
大場 勉	東京		工藤弘道	早稲田	副	吉田淳一	明学	副
吉岡卓也	拓殖	副	増田芳久	中央	副	竹内芳人	早稲田	会
			小林正行	明学	会	玉井英夫	拓殖	会
			堀田武治	専修	渉	千葉一彰	東京	総
						勝亦 進	成城	企
						藤本藤二	日本	企

11期(昭和45年)

真貝 栄 明学 委
加来健一 成城 副
川口永一 早稻田 副
佐々木均 専修 会
松尾 隆 日本 渉
藤野泰男 東京 記

12期(昭和46年)

石川和夫 早稻田 委
大久保律雄 拓殖 副
小出 豊 明学 副
中田英昭 東京 会
田下啓一 専修 記
吉田秀一 日本 渉
松井 明 成城 企
吸地重雄 中央 総
平井敏信 明星 幹
立花英昭 桜美林 幹

13期(昭和47年)

宇田悦貴 拓殖 委
権代憲策 中央 副
相坂謙悦 専修 副
熊坂 栄 明学 渉
小出英雄 日本 総

14期(昭和48年)

赤泊英哉 中央 委
蟹江良一 拓殖 副
堀 英博 明学 副
山内正雄 東京 会
竹内忠洋 専修 記
平沢 純 成城 渉
森田泰弘 日本 企
難波秀記 桜美林 幹

15期(昭和49年)

佐藤雄司 成城 委
市川雅康 拓殖 副
白鳥幸敏 明治 副
吉野 隆 中央 会
鈴木達次 専修
根本雄一 東京 副
小谷康幸 明学
飯田 博 早稻田

16期(昭和50年)

中神雅人 中央 委
半司知巳 東京 副
藤田世潤 早稻田 副
坂井 豊 明治 会
小宮公則 日本
飯山浩吉 成城

17期(昭和51年)			21期(昭和55年)		
吉川英夫	早稻田	委	八巻 稔	拓殖	委
鈴木太郎	明学	副	菊池 傑	中央	副
江口和親	明治	副	松尾重巳	桜美林	会
渡辺明仁	専修	会	大森新一郎	中央	企
金山栄吉	拓殖	総	22期(昭和56年)		
三浦弘至	桜美林	渉	今泉美保	早稻田	委
18期(昭和52年)			芽根正宏	中央	副
竹下克美	専修	委	越智信喜	東京	副
館山 武	拓殖	副	高橋清一	中央	幹
小口誠作	中央	副	古川浩之	明治	会
小林顕彦	中央	副	根来俊久	東京	総
加藤大和	中央	幹	吉沢 賢	中央	総
笠原 均	成城	企	23期(昭和57年)		
田中 保	明治	総	浅田 毅	中央	委
19期(昭和53年)			松沢 宏	早稻田	副
筑茂重仁	中央	委	大谷知未	東京	副
20期(昭和54年)					
宮本正雄	早稻田	副			
寒河江正人	日本	副			
河合正行	専修	会			
塚本修久	明治	渉			
斉藤義明	拓殖	幹			
加藤頼義	明学	総			
和田達夫	東京	記			
大川雄一	専修	委			
井川裕行	早稻田	副			
三瓶美憲	桜美林	副			
公文寛朗	専修	会			
江藤尚志	成城	幹			
三宅宏司	中央	総			
平野行孝	中央	総			
寺川富啓	中央	総			
関根 宏	拓殖	企			
寺戸 忠	明学	企			

上岡由起男 明治 幹
上溝武則 専修 会

24期(昭和58年)

増山輝義 明治 委
石田俊正 東京 副
辻 伸晃 早稲田 副
大塚俊之 拓殖 幹
小野重光 中央 会
三原恵理子 中央 書
(旧須藤)
大津寿美 専修 企

25期(昭和59年)

畠山裕弘 専修 委
谷田辺浩 早稲田 副
武田裕二 東京 副
内藤健一 早稲田 幹
村松正朗 中央 会

田辺和弘 明治 企
松本雄造 中央 総

26期(昭和60年)

保木俊司 拓殖 委
小沢仁志 早稲田 副
伏田広幸 中央 副
小暮喜一 明治 幹
川鍋清隆 明学 企
岩崎貞明 東京 会

27期(昭和61年)

平野勝己 明治 委
菅原龍男 東京 副
谷村直城 早稲田 副
藤生幸男 早稲田 幹
大宮千秋 専修 会
日野孝幸 中央 企

28期(昭和62年)

田中正也 東京 委
渋谷勇治 中央 副
前田浩二 明学 副
辻 善行 拓殖 幹
平岡義淳 専修 会
小嶋秀徳 早稲田 企

29期(昭和63年)

小松山英太郎 早稲田 委
日向知史 拓殖 副
大貫成美 専修 副
平田経一 東京 会
刀川勇一 中央 企

30期(平成元年)

辻 伸吾 上智 委
神谷広幸 東京 副
伊藤敏郎 専修 副

宇野達雄	関ひろ美	羽鳥秀介	圖師守和	蓮香正英	3 2 期 (平成3年)	鐙木恵子	葛山 宏	実石利幸	鈴木美輝	児玉晃治	末廣丈男	3 1 期 (平成2年)	山本征司	西尾 努	橋本喜久	藤岡拓治
専修	上智	早稲田	中央	東京		中央	中央	拓殖	早稲田	上智	専修		早稲田	明学	中央	拓殖
	会	幹	副	委		書	会	幹	副	副	委					

中里清乃	中里見真理	石川正和	吉本 薫	高木辰徳	小林賢一郎	矢口朋来	3 4 期 (平成5年)	但野端子	石川敦子	宇野達雄	蓮香正英	関ひろ美	羽鳥秀介	圖師守和	3 3 期 (平成4年)	石川敦子
中央	上智	中央	専修	拓殖	東京	東京		中央	拓殖	専修	東京	上智	早稲田	中央		拓殖
総	書	会	幹	副	副	委		書				会	幹	副		

菅野貴裕	溝口義郎	千葉陽一	永田泰三	中 真生	奥山英男	荒井 剛	3 6 期 (平成7年)	小野寺公子	鴨沢義勝	神谷以土子	高木恭子	鈴木克敏	田中茂樹	市丸 徹	清水寿哉	3 5 期 (平成6年)
専修	早稲田	東京	拓殖	東京	明治	中央		金沢	上智	拓殖	中央	東京	中央	東京	拓殖	
			幹	副	副	委					会	幹	副	副	委	

37期(平成8年)			38期(平成9年)			39期(平成10年)		
小林賢一郎	東京	委	河口大輔	東京	委	大西 繁	専修	委
櫻木淳一	明治	副	植田 修	中央	幹	小原圭介	東京	副
岸本有巨	中央	幹	大武美保子	東京		荒井美乃	東京	書
大畑千春	東京		守山美樹	中央		井上和靖	東京	
宮越亜佐子	中央							
安達愛	上智							
40期(平成11年)			41期(平成12年)			42期(平成13年)		
大野久美子	中央		荒川大地	専修	委	鈴木雄大	東京	委
川田 晃	拓殖		井田篤志	拓殖	副	北条隆夫	中央	副
			松浦妙子	東京	副	松原 誠	拓殖	副
			鈴木雄大	東京	会	二見崇史	東京	総
			松村 陽	上智	幹	増田賢司	上智	幹
			中山章太郎	明治	総	木島千端子	中央	人
						鈴木真世	専修	書
						佐藤有紀	明治	渉
						五十嵐洋介	東京	会
						43期(平成14年)		
						五十嵐洋介	東京	委
						鈴木宏治	拓殖	副
						犬塚 彩	中央	副
						百井美由紀	拓殖	幹

4 5 期（平成16年）			4 4 期（平成15年）					
前田昭平	専修	委	猪俣洋右	拓殖	委	大内直人	専修	総
			羽鳥 敦	中央	副	大林直樹	中央	企
			糟谷綾子	明治	副	宮島 望	東京	渉
			斉藤智子	中央	幹	寺保美有紀	専修	書
			北村真希子	拓殖	総	羽鳥 敦	中央	会
			外間実樹雄	専修	編			
			久須美千晶	中央	渉			
			佐藤友子	東京	渉			
			前田昭平	専修	会			
4 6 期（平成17年）								
石原祐一	中央	内	加藤真弓	中央	委	戸田洋介	拓殖	副
齋藤敏道	明治	渉	村上雅俊	拓殖	副	赤芝有紀	中央	副
柏原一輝	東京	編	五十嵐俊輔	専修	副	片岡 伸	明治	幹
杉山絢香	東京	総	五十嵐奈央	拓殖	幹	福村晃弘	東京	総
						南山泰之	中央	編
						浅田真理	英和	渉
						石毛剛臣	明治	渉
						横山美尋	専修	企
						五十嵐俊輔	専修	会
4 7 期（平成18年）								
鍵元美穂	専修	編	廣瀬英治	拓殖	渉	森田宙花	明治	書
大庭康裕	東京	委	橘高佳恵	東京	シ	永田拓也	拓殖	会
			児島亮平	東京	編			
			斉木佳奈	英和	渉			
			児玉朱美	英和	会			
4 8 期（平成19年）								
			本間沙弓	専修	総	堀 孝吉	中央	副
			水中敬子	中央	渉	石幡絵美子	明治	幹
			町田 大	専修	内	永田拓也	拓殖	委

成田正一	中央	幹
橋枝 俊	明治	総
諸橋憲生	拓殖	渉
越元健太	拓殖	渉
西 沙織	専修	内
竹本千尋	東京	編・シ
児玉朱美	英和	会
藤野久美子	英和	補

49期(平成20年)

成田正一	中央	委
込山裕太	拓殖	副
酒井拓斗	明治	渉
安達智子	中央	広
児玉朱美	英和	名
衣川卓宏	東京	情
西本佳加	東京	編
藤野久美子	英和	会
西 沙織	専修	補

50期(平成21年)		
沢柳賢二	専修	委
中庭雅子	中央	副・広
酒井拓斗	明治	副・渉
石山誠之	拓殖	渉
大和田明子	英和	名
小林数磨	専修	編
木下清隆	東京	編
森元鷹志	中央	情
黒瀧すずか	東京	会

51期(平成22年)

小金井巧	中央	委
西田健太郎	東京	副・広
久万純平	明治	渉
平田高嗣	拓殖	名
齋藤光雪	専修	情
松井 淳	東京	編
藤牧あゆみ	中央	会

52期(平成23年)		
上里允隆	拓殖	委
秋山摩利	中央	副・幹
勝木洋臣	東京	副・渉
岩崎裕久	専修	渉
河村麻梨子	東京	会
青木真理恵	英和	補
中田博之	中央	編
楠見亮平	明治	名
銭谷聖文	拓殖	情

53期(平成24年)

浜井 優	東京	委
中村義人	中央	副・幹
石田真将	拓殖	副・渉
多田啓人	東京	会
渡邊康平	明治	名
浅川拓哉	専修	渉
金内友里	英和	情

青木那広 専修 編

54期(平成25年)

丸山貴之 中央 委
北川なつき 東京 副・管
近岡 光 専修 副・渉
大久保莊一 東京 会
山本恵未 中央 編
伊禮巧真 専修 渉・補
大川未紗子 英和 情
落合成昭 拓殖 幹
河合慶太 明治 名

55期(平成26年)

望月淳平 専修 委
高取 慧 専修 副・渉
鈴木貴裕 中央 副・編
堀松知剛 東京 会
福伊永花 東京 管

日野皓文 拓殖 情・幹
船木翔太 明治 名

56期(平成27年)

中西亮介 東京 委
村中礼菜 東京 副・編
小島知樹 専修 副・幹
高石 治 専修 渉
三軒家綾香 明治 名
武塚直也 早稲田 管
岡田啓太朗 中央 情
石井豪浩 拓殖 会

57期(平成28年)

岡田啓太朗 中央 委
石井豪浩 拓殖 副
小野沙耶 明治 副・名
小早川みづき 中央 編
三田眞貴子 早稲田 管

石塚幹菜 東京 渉
塚田裕介 東京 会
人見優斗 専修 情
中田 恵 専修 編

58期(平成29年)

河合萌子 東京 委
中田 恵 専修 副・編
橋本佳奈実 明治 副・名
八城裕樹 東京 会
人見優斗 専修 管
下地 匡 中央 渉
中村達哉 専修 情

59期(平成30年)

小川希生 早稲田 委
大島康輝 明治 副・渉
遠藤功司 東京 副・編
今西浩人 東京 会

中村達哉 専修 情
笠谷佳範 中央 名

60期(平成31年)

飯塚浩祐 専修 委
藤本侑花 中央 副
迫本和也 早稲田 渉
宮脇英佑 早稲田 編
森海 翔 東京 会
笠谷佳範 中央 名
柴田由貴 専修 情
長縄礼香 東京 広
治郎丸諒 明治 幹

61期(令和2年)

味園瑞萌 中央 委
大久保拓紀 明治 副
藤澤留依 中央 渉
松家京平 早稲田 編

西明日香 東京 会
伊藤千瑛 早稲田 名
与那城竜太郎 専修 情

62期(令和3年)

飯島 武 中央 委
森 美鈴 明治 副
長尾太玖海 東京 会
保坂茅陽 中央 渉
萩 裕斗 専修 情
刈谷慧斗 専修 情

63期(令和4年)

池田将吾 東京 委
釜谷明英 明治 副・編
磯部 望 中央 渉
石田龍之介 中央 渉
井手正人 東京 会
若旅雅弥 早稲田 情

高野郁大 拓殖 情

64期(令和5年)

佐々木玲音 専修 委
藤丸晃浩 東京 副・編
小林千紗 中央 渉
前田亜由香 東京 会
赤根広海 中央 広
荒川将一 早稲田 情
櫻田碧海 拓殖 情
真栄城玄規 明治 情
岡田太陽 国土館 情

65期(令和6年)

山本佳奈 中央 委
眞栄城玄規 明治 副
徳竹道大 専修 副・編
橋本和弥 中央 渉
大友彩凜 東京 会

岡田太陽	谷口紗梨	篠崎一輝	岡陽太
国士館	早稲田	国士館	中央
情	情	情補	渉補

六、全日本学生合気道連盟規約

全日本学生合気道連盟規約

施行 昭和三十四年

改正 平成二十年九月十日

第一章 総則

第一条（目的）

本連盟は学生間における合気道の普及発展と、連盟校相互の連絡並びに互いの親睦融和を図り、学生合気道の発展に寄与することを目的とする。

第二条（流派）

流派はこれを問わない。

第三条（名称及び事務所）

- ① 本連盟は全日本学生合気道連盟と称する。
- ② 本連盟は事務所を日本武道館内に置く。

第四条（事業）

本連盟は第一条の目的を達成する為に以下各号所定の事業を行う。

一、演武会

二、合同合宿

三、演武旅行、合同稽古、刊行物の発行

四、その必要と認められる諸事業

第五条（構成単位）

本連盟は各大学公認の合気道部、又は連盟委員会によってこれに準ずると決議された合気道会の大学単位を以って構成する。

第二章 加盟及び脱退

第六条の一（加盟）

- ① 連盟加入に当っては、第七条に定める書類を事務所に提出しなければならない。
- ② 新規加盟は連盟委員会による審議を経た後、十六条二項に定める議決により効力を発する。

- ③委員長は、前項の審議を行うために、書類の提出から二週間以内に委員会を招集しなければならない
- ④第五条後段に当たる大学を加盟させるに当たっては、正式加盟までの一定期間、これを準加入とすることができ

第六条の二（脱退）

- ①六条の一の一項ないし三項の規定は、任意脱退の場合に準用する。
- ②連盟委員会は、第二十四条一項各号に当たる加盟校を強制的に脱退させることができる。

第七条（登録）

- ①加盟校は毎年、以下各号の連盟事務所へ文書を以って提出することを要する。

一、名称

二、所在地

三、連絡場所

四、加盟校規約

- 五、本年度役員氏名、住所、連絡先
- 六、行事日程
- 七、加盟員名簿
- 八、その他必要と認められる諸事項
- ②前項の提出は、電磁的方法により行うことができる。

第三章 機関

第一節 総則

第八条（機関）

- ①本連盟は常時、第二節に定める連盟委員会を置く。
- ②本連盟は、必要と認める場合に顧問及び最高顧問を置く事ができる。
- ③前項顧問及び最高顧問は、連盟委員会の決議を経て、委員長がこれを委嘱する。

第九条（任期）

- ①任期は一年とする。但し任期中に交代する場合は、後任者の任期は前任者の残余の任期とする。

②再任はこれを妨げない。

第十条（顧問） 削除

第十一条（最高顧問） 削除

第二節 連盟委員会

第十二条（連盟委員会）

①連盟委員会は、連盟の最高機関である。

②連盟委員会は、本連盟事業計画の立案及び実施を行う。

第十三条（構成）

①連盟委員会は、連盟委員によって構成される。

②連盟委員は、加盟校より選出される。

③連盟委員会は、委員長一名、副委員長二名を定める。

④削除

第十四条（担当委員）

連盟委員会は、以下各号に定める担当委員を置く。

一、渉外

二、広報

三、名簿

四、情報管理

五、編集

六、会計

第十五条（委員会）

①連盟委員会は毎月一回、定例委員会を開く。

②委員長が必要と認めた場合には、緊急委員会を召集する。

第十六条（定足数及び議決）

①連盟委員会は委員の三分の二の出席により成立する。

但し、委任状も可とする

②連盟委員会の議決権は、各委員につき一票とし、議決

は出席委員の過半数により成立する。賛否同数の場合は、委員長の決定するところによる。

第三節 任務

第十七条（任務）

- ① 委員長は連盟を代表する。
- ② 副委員長は委員長を補佐する。

第十八条（誠実義務）

連盟委員は任務を迅速かつ誠実に行わなければならない。

第四章 会計

第十九条（経費）

連盟の経費は、加盟費、分担金、寄付金、その他の収入を以って充てる。

第二十条（会計年度）

会計年度は毎年十一月に始まり、十月に終る。

第二十一条（予算）

予算は、会計担当委員が之を作成し、連盟委員会の承認

を得る事を要する。

第二十二条（決算）

決算は、会計担当委員が之を作成し、連盟委員会の承認を得る事を要する。

第二十三条（細則） 削除

第五章 罰則

第二十四条の一（罰則規定）

連盟委員会は、以下各号に定める処分を行うことができる。

- 一、強制脱退
- 二、権利停止
- 三、警告

第二十四条の二（脱退）

- ① 連盟委員会は、以下各号に該当する加盟校を、強制的

に脱退させることができる。

一、連盟の威信を著しく傷つけた場合。

二、連盟の規約に違反した場合。

三、連盟と他団体の関係を著しく悪化させた場合。

四、その他不相当と認められる場合。

②脱退処分を行う場合には連盟委員会は直ちに調査委員会を組織し、之を調査することができる。

第二十五条（復権）

除名処分校の復権は、十六条二項に定める決議による。

第六章 改正

第二十六条（改正）

本規約の改正には、連盟委員総数の三分の二以上の同意を要する。

七、卷末特集

アンケート「合気道を始めた時から現在にかけての

合気道に対する考え方の変化」について

合気道を続けて変化したことは他の人への伝え方だ。武道の技を他人に正確に伝えることは非常に難しい。自分がイメージしたように動いてくれることの方が少ない。その主な原因は技を言語化した時に、受け取る人の前提知識によって、言葉の受け取り方が異なることだと考える。例えば、「剣を振るように腕を使え」と言った時に、剣術の素養がある人はこの言葉をスムーズに理解できるが、剣を振り慣れていない人は言葉の意図を正確に把握できない。相手の知識量を把握した上で言葉を用いなければ、伝えることは難しい。自分は技を伝える時に、相手の知識を把握した上で伝えている。私は合気道を続けていく中で、伝える力をさらに鍛えていきたい。

金沢大学体育会合気道部 副務 西原彰人

合気道を始めたきっかけは、何か新しいことを始めたいという思いからでした。実際に合気道を始めてみると、先輩の言っていることが難しく聞こえ、技も多く混乱しました。しかし、いつも丁寧に教えていただいたおかげで、少しずつできる技も増え、技同士のつながりがわかってくると、だんだん面白くなってきました。黒帯になってからは、新しい技を習うことも楽しいですが、基本に近い技でもうまく教えることができなかったり、先生に間違いを指摘されることもあるため、まだまだ上達すべきことがあるなと感じています。また、技の面だけでなく、合気道によりできた先生や他大学とのつながりは、学生生活においてもよい経験となっていると感じます。

近畿大学体育会合気道部 主将 井上 竣介

入部当初、合気道は護身術でありあまり実戦的ではないと思っていました。1年目から私は演武を中心に稽古をしました。演武を通して学んだことは、演武は相手とどれだけ息を合わせられるかが上手さではないということです。どれだけ実戦的にできるかが上手さであり、それこそが合気道であると思います。演武は相手と技や構成を決めて何度も練習するため演技のようになりがちですが、ただ息が合っているだけでは技はしつかりとかかっている場合がありません。攻撃も中途半端では相手の力を上手く使って技をかけることができません。実戦的であってはじめて合気道ができていると感じられるのだと思います。私は4年間そのことを忘れないように取り組んできました。

また、私たちの流派は乱取りがあります。1年生の途中から私は乱取りにも挑戦しました。初めは力や身長体重がないと不利だと感じていました。しかし先生方や先輩、同期と稽古を続けるうちに、力や身長体重はあつたら少し有利くらいなのではないかと感じるようになりました。大切なのは相手の力を上手く利用することやタイミングで、それらは演武にも通じるところがあると思いました。

国士舘大学合気道部 主将 酒井花菜

合気道部を始めたばかりの頃は、大学生活で運動不足にならないために合気道に取り組むという以上の目的はなかった。合気道を学ぶにつれて、技を効かせられるようになりたいという思いが強くなり、その仕組みや狙いがあるのかを学ぶことがとても楽しくなった。技の掛け方を学んでも、それを実行できるようになるには時間が必要だが、その努力をすることにも楽しみを見出していた。現在では先輩に教える立場になり、自分が基本を理解出来ているかテストされているような気持ちになる。自分の技術は未熟で、まだ自分も分からないところや先輩に正確に伝えられない部分もあり、もっと精進していきたいと感じている。

上智大学体育会合気道部 主将 梅本仁恵

乱取りという競技に関しては、始めた当初、ある程度のフィジカルがものを言うと考えていました。しかし、基礎の練習や監督との練習を積み重ねていく中で、無駄な力が入り硬直した技ではなくタイミングの良い滑らかできれいな技を目指す必要があると感じました。

また、形に関して、習い始めた際は全員が全く同じ技をかけるのではないかと考えていましたが、様々な人に技を教わることで同じ技でもかけ方は人それぞれ少しずつ違っており、自身でも研究し考えていく必要があると理解し、現在は想像していた以上に合気道は奥が深いと感じています。

総合して考えることは、合気道というものは乱取りと形どちらにも偏りなく稽古に励むことが大切であり、その考えが始めた当初から現在にかけて最も変化した点であると思います。

成城大学合気道部 主将 宮下遥貴

合気道はなにも達人技をできるようにならなくてもいい。合気道の売りは老若男女誰でもできるというところ。ということとはこうとも解釈できる。その人にはその人なりの合気道があつていい。もつと言えば、たとえ同じ人でもその日の体調、メンタル、年齢によってやり方も変わる。でもそれでも変わらない本質を達人から学ぶべきであり、見せかけのコピーアンドペーストでは、逆に面白みがない。私たちは、いま学生であり、人生でもっとも元氣あふれる期間である。それフルに活かさずしてなんとする。地に足ついた合気道を続けていけたらと常々思う。

専修大学体育会合気道部 主将 秋本壮太

私は将来の夢に近づくために合気道をして資格を取得したかった、という単純な気持ちで合気道を始めたため、当時は合気道について何も考えていなかった。あくまでも合気道は将来の夢に近づくためのステップの1つで大学4年間で終わるものだと思っていた。しかし、昨年頃から自分がかけている技は本当に相手にかかるのか、技がかかるようにするにはどう工夫すれば良いのかを考えるようになった。合気道に対する一番の変化は、ただ合気道をしかたかっただけで何も考えていなかった私が4年間一所懸命に稽古に取り組んだことにより、生涯ずっと続けていくことができる武道であると感じたことである。合気道の最大の良さは年齢性別に関係なくできることである。社会人になってからは難しいかもしれないが、時間に余裕があれば継続して稽古をし、おばあさんになっても合気道をしていたいと思っている。

中央大学学生会体育連盟合気道部 主将 田中優美

自分は大学に入って合気道を始めた。合気道という気という漢字が入っているので何か精神論的な武道だと最初は思っていた。しかし、気を合理的に使う武道だと今は考えている。合気道で一番大事なことは、腹にどれだけ集中できるかだと自分は思っている。上体だけで力を出すには限界があるので下半身を使うことが大切である。そして、上半身と下半身の真ん中、体の中心である腹から力を出す、そのためにそこにどれだけ集中できるかが、技の巧拙を決めると思っている。ここで集中すると書いたが、単純に物理的に集中するだけでなく気持ちもそこに集めることが大切だと思う。いくら技術的なところばかり磨いたとしても相手を制してやる、相手に負けないぞという気持ちがあれば技を決めることはできない。その気持ちをどうやって合理的に技に繋げるのかというのが合気道だと思う。

東京大学運動会合気道部 主将 山口耕平

私が合気道を始める前の合気道のイメージはとりあえず護身術として学ばれているらしいという程度の認識しかありませんでした。長井師範の下で合気道に触れ始めて1年少し経った今、①「力」を以って相手への干渉を行うと、相手からも「力」として返ってきてしまうこと、②またその「力」は意識してしまうと、その部分的な「力」しか意識ができなくなり、③最終的には相手とぶつかる（ただの「力」勝負）しかなくなってしまう。またこの「力」は身体操作の際に限った話ではなく、精神的な人間関係等についても共通であるという考え方を認識したことが合気道を始めてから現在にかけての考え方の変化の最たるところだと考えています。

富山大学体育会合気道部 主将 小谷田琉聖

元々はフィクション的なものだと思ってましたが実際稽古してみると現実的で合理的な仕組みで面白いと感じた。

明治大学体育同好会連合会合気道部 主将 宮尾玲宏

二点ある。第一に、「術」のみならず「心」も鍛えられるという点である。入部前、合気道の稽古は合気道の技術を向上させるものであると考えていた。それは間違いなかったが、それだけでなく精神面の成長も感じられた。厳しい稽古、試合前の緊張、恐怖、悔りなど。心の成長にとって、貴重な経験をさせてもらっていると日々感じる。第二に、わざの説明が抽象的でなく「科学的」であった点である。今思えば傲慢なことに、入部前は、合気道の技はニセモノと考える節があった。しかし、入部して、実際に技を受ける。そして、身体的、生理的に理にかなった説明を受け、その考えは改まった。

早稲田大学合気道部 主将 原野 剛成

編集後記

まず始めに、今年度の連盟誌を発行するにあたり、様々な面でご協力いただきました、先生方、加盟校の皆様、スポンサーの皆様をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

二〇二三年末、ほぼコロナ禍前と同じような生活に戻り、幸いにも制限がほとんどない中でスタートできました我々六十五期連盟委員一同は、これまで制限されていた活動をどこまで再開させるか試行錯誤をしながら、出来る限り効率よく連盟の運営ができるように全力を尽くしてまいりました。

その中で、効率を重視しすぎるあまり、数度誤った方向に進んでしまいそうになることがありましたが、先生方のご助言をいただいたり委員で密に議論したりすることで、運営を正しい方向に進めて来ることができたと思います。私たちはそのような出来事の中で、人とのつながりの大切さを学ばせていただきました。編集担当といたしまして、様々な方々とやり取りを

させていた中でも、人とのつながりの大切さを実感いたしました。そんな人とのつながりによって発行ができました第五十二号連盟誌を、皆様にお読みいただけたことを心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、今後の加盟校及び全日本学生合気道連盟の益々の発展を祈念いたしまして、編集後記と代えさせていただきます。

第六十五期編集責任者 徳竹道大

連盟誌 第五十二号

令和六年十月十三日発行

発行責任者 山本佳奈

編集責任者 徳竹道大

発行所 東京都千代田区北の丸公園二―三

日本武道館学生武道クラブ内

全日本学生合気道連盟

印刷所 スピード冊子印刷.com

電話 〇二〇（九三九）八三四

<http://speed-books.com/>

明治神宮 武道場 至誠館

〒151-8557

東京都渋谷区代々木神園町1-1

電話：03-3379-9137

祝 全日本学生合気道連盟誌 第52号



武道具デパート

株式会社 櫻 屋

〒102-0073 東京都千代田区九段北1-3-4

TEL: 03-3262-1969

地下鉄 九段下駅 3b出口前

www.sakuraya.org